
短編集・鶏箱

着地した鶏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編集・鶏箱

【Nコード】

N3393N

【作者名】

着地した鶏

【あらすじ】

これは玩具箱、宝箱、はたまた路地裏のゴミ箱か。
基本的にはコメディーばかりなんだよ、覚悟しやがれ……みたい
な感じの短編集。

短編20本で終了予定。というわけで5月1日完結。

神様の天罰計画（前書き）

> i17506 | 1270 <

ジャンル：コメディ

神様の天罰計画

ここは宇宙の中心部。

天体が行き交い、消滅してはまた生まれる、そんな宇宙。

「まったくけしからん！」

そんな風に声を荒げて怒っているのはこの宇宙の創造主、神様とか何とか呼ばれている自称“超高次概念的存在”だ。

“超高次概念的存在”と言われてもわけがわからないだろうが要するに宇宙で一番偉い存在という風に理解してくれたら幸いである。

さて、さすが神様らしいと言うべきか、その概念的存在がわめき散らすたびに宇宙のエントロピーが崩れて星が二、三爆発するのである。

はい、ほらまた一つボカーン、ドーン。バキューン、ズバーン。

あーあ、今日はまた派手にやってるね。それにしてもこの轟音を何度も聞いてると鼓膜がどうにかなりそうだ。

まったく、いい加減にしてほしいものだ。

「何か文句でもあるのか!？」

うわっ、ナレーションに話し掛けないで下さい！ 非常識だな。

「ふん。この創造主様の前では常識など何の意味も持たんのだよ」
本当に何でもありませんね、超高次概念的存在てのは。

まあ、どーでもいいので話を進めましょう。

ところで質問です。さっきからむやみやたらに惑星を爆破してま

すけど何にそんなに怒ってるんですか？

「よく聞いてくれた。いいか？この宇宙の創造主であるワシのもとへは全宇宙からの声が伝わってくるのじゃ！」 『創造主様ありがとう』 『神様のおかげです』という具合にな。」

はあ、それだけ神様が色んな星で信仰されてるってことですね。

「じゃがしかし、ここ最近全く信仰の声も何も来ない天体があるのじゃー！」

へえ、どこですか？

「地球じゃー！」

地球？ 何でまた。

「あの小さな星には何百万もの手下を派遣しているのに全く音沙汰無しとは！ 全く舐めくさっておるわ！」

まあまあ、落ち着いて下さいよ。

「うるさいッ！！ よしッ、もうワシの堪忍袋も我慢の限界じゃ。地球へと赴き天罰を加えてやるっぞ！」

そう言うつと神様は光となって宇宙の中心部から姿を消した。

*

「ちよつと署まで来てもらおうか」

「おい、こら！ 放せっ、放さんか！」

「はい、こちら8号車。通報現場で暴れていた住所不定無職の若者を補導中」

「無職とは何じゃ無職とはっ！　ワシは神様じゃぞ！」

「はいはい、詳しい話は署で聞こうな」

遡ること30分前、東京渋谷の路上で一人の若者に痛い程の注目が集まっていた。

「ふふっ、愚民どもめ。ワシのオーラを目の当りにして声も出せないようじゃな」

いや、全裸の人間がスクランブル交差点のど真ん中に突っ立てたら普通の人は言葉を失うであろうね。

「な、なに！？　姿形まで愚民どもと同じにしたのにダメなのか！？」

ダメです。天罰どころ言う前に捕まりますよ、アンタが。

「うぬぬ、仕方がない。おい、その金髪ピアス！　貴様の服をよこせええええ！」

歩いていた金髪ピアスのチャラ男に襲いかかる全裸の神様。

何かを叫びながら必死で逃げるチャラ男。

人混みから次々とあがる黄色い悲鳴。

全裸の若者から逃げる人の波、泣き叫ぶ女子。

全裸の若者を撮影する写メの音。

車道に逃げる人々、急ブレーキでタイヤが焼ける臭い。

ぶつかり合う車の破壊音、鳴り響くパトカーのサイレン。

そこはまさに現代の地獄絵図だった。

「というか、神様なら服ぐらい自分で何とかできるでしょう？」

「おお、そうじゃった」

全裸の神様が両手を挙げて何やらブツブツと唱えると、全裸の神様の体は月に代わってお仕置きをするヒロインのように一瞬にして衣服に包まれた。

本当に何でも有りですね。

「神様がストリーキングで捕まってしまったては元も子もないから
う」

そう言つて神様は人混みの中へと進んでいく。神様が服を着たせいか周りの人たちも神様には目も向けない。

さっきまでギャーギャー騒いでいた群衆も落ち着きを取り戻し、駆け付けた警察も一般人と化したストリーキング……もとい神様を見つけたすことはできなかつた。

よくよく考えればそんな簡単に騒ぎが治まるわけがないのだが、何かの撮影の類だと思つたらしく本当に騒ぎは一瞬で治まったのだ。現代人の無関心と傍観者精神の賜物なのだろうか。いや、そういうことにしておいてほしい。

*

群衆の中をぐんぐん進む神様。

すれ違つ人と肩がぶつかろうが足を踏もうが、まったく気にせずズンズンと我が道を歩んでいた。

あれ？ 天罰はどうなつたんですか？

「天罰落とすだけならわざわざ地球まで来んわい。まずは何で地球人がワシに無関心なのかリサーチする必要があるのじゃ」

リサーチ？

「そうじゃ、マーケティングの基本は自らの足による実地調査じゃからの。原因の究明とそれに基づいた考察が適切な問題解決策を生み出すのじゃ」

冒頭で理由も無しにたくさん星を潰した人の台詞とは思えませんね。

「うるさいっ！」

おや、知らない外国人が近づいてきましたよ。

「アナータは神を信じますか？」

「ワシが神じゃ！」

あまりにベタな台詞を吐いた外人に対して、神様もこれまたベタベタな返事をしてしまったのであった。

もう、これは『山』と聞かれて『川』と答えるぐらいベタな返答じゃないでしょうか。

まあ、それは良いとして、何やら神様はご立腹のようです。襟を掴んで外人をキリキリと締めあげてます。

「そもそも貴様からはワシに対する敬意が1ミクロンも感じられんぞ！ 『神を信じますか』などとほざいておるくせに」

「OH！ ジーザス！ この哀れな仔羊をお救い下さい」

食って掛かる神様を頭のイタイ若者だと思い、外人は天を仰いで祈りのポーズをした。

そう言えば、ここで豆知識。

よく外国映画で「ジーザス」と叫ぶシーンがありますがこの「ジーザス」というのはイエス・キリストの英語読みで「ジーザス・ク

リスト」のことだそうですね。

「オー、マイゴッド（ああ、私の神様）」と同じようなニュアンスなのでしよう。

「何？ それは本当か」

ええ、そうですが何か？

気付けば神様と外人の周りに黒山の人だかりができていた。その群衆を見渡した神様の表情は困惑の色を示していた。

イエス・キリスト、アツラー、釈迦、手塚治虫、キラ……群衆の頭上にそれぞれ信仰する神の名が記されているのである。もっともそれは神様だけにしか見えないのだが。

説明しよう。神様の眼は人々の信仰する神すらも暴くことができるのだ（もちろん神様の常識を無視した能力さ！）

ところで何なんでしょう、手塚治虫ってのは……。

「お主、漫画の神様を愚弄するなりか!？」

だ、誰ですか、あなたは!？」

「禁則事項なり」

もう、話がややこしくなるからどっか行って下さい。

さて、話を戻しましょう。

ムラムラ群がった群衆を見て神様が困惑しているところからです。

「な、何ということじゃ」

群衆の頭上を見て啞然とする神様。それもそのはず、神様にとっ

てキリストだの何だのは……

「クソッ、奴らやりおったな。ワシが派遣した部下を愚民どもは信仰していたというのか！」

どうやら、神様は直接手を下さずに部下を派遣して色んな惑星から信仰を勝ち取っていたようですね。

でも、地球に派遣された部下は自らが信仰対象となってしまうた、と。

「奴らめ、ワシの目の届かん所で好き放題やりおって……許さんぞッ。この星もろとも破壊してくれるわッ!!」

神様はアニメキャラが必殺技を出すように右手を天高く挙げて、関節が外れるのではないかというくらい思いつきり振り下ろした。

「天罰てきめん靦面！ 神の雷霆！」

しかし、振り下ろされた右手の先……というか指の先で小さな静電気が申し訳なさそうにパチパチしていた。

世界が至って平和なまま、時報は12時をお知らせします、ピ、ピ、ピ、ピーン。

さあ、冗談はさておき、そのちっこいのが“神の雷霆”なんですか？

「そんなワケなかつう！しかし何故じゃ、何故天罰が落とせんのだや！」

神様は応援団ばりに何度も手を挙げたり下げたりするものの指先の静電気は小さいままだ。

もしかして、神様が信仰されていないからじゃないですか？

「ぬ？それはどういうことじゃ？」

天罰なんていうのは、いわば信仰の権化みたいなものですよ。

愚民たちからの信仰のエネルギーを使うことで神様は神様らしい力を使うことができますたんです。

宇宙では神様の元へ多くの信仰が集まってましたが、地球^{ココ}では神様を信じる人は誰一人いない！

つまり信仰パワーを失った神様はまさに無力！

「ち、ちよつと待たぬか！ 信仰パワーが無いといってもさつき服を思い通りにできたし、それに宇宙全土からの信仰パワーもあるではないかッ！」

うーん、それはたぶん地球に来たり、人間の姿になったり、服を出したりしたときに今まで貯めてた信仰エネルギーを使いきっちゃた、とか。

「え、そんなに信仰エネルギーの蓄えって少なかったのかのう？」

いやいや、だって神様が地球に来る前、『わしの体を全部地球に持って行くのは重くて面倒じゃから大部分は置いていくことにしようかの』とか言って本体はほとんどあっちに置いて行ったじゃないですか。

「じゃ、じゃあその概念体をこっちに呼び寄せればワシの力は戻るのか！」

そういうことになりますね。ちよつと計算してみましょー……。

あー、無理ですね。本体がこつちにあるんで地球に届くまでに五十六億七千万年かかります。

「そ、そんな。な、何とかならんのか？全宇宙からの信仰パワーがあるではないか」

無理です、何ともなりませんね。

そもそも、神様が概念的存在であるかぎり“信じ”られなければ神としての神様は存在しませんからね。

いくら全宇宙からの信仰パワーがあつても、神様を信じてない人たちにとっては“天罰”なんてコト自体存在しないんですよ、たぶん。

「な、なんじゃと!？」

なんと信仰対象である神様は信仰されなければ力も持てない無力な存在だったのだ。

鰯の頭も信心からと言うけど、今の神様は鰯の臍物にすら劣るほどの弱者なのである。

「フフフ、ハハハハハ！」

狂ったように笑う神様。

それを哀れむ外人、アーメン。

「うるさいッ。まあよい。おい、“信仰心”が必要な“天罰”は効果が無いのじゃな？」

一応はそういうことになりますね。

すると何を思ったのか、神様は再び両手を高く挙げた。

「異常気象―!!」

神様がそう叫ぶと空はみるみる暗くなって雨が降りだした。

すかさず轟音が鳴り響いて目の前がピカツと光った。

……落雷ですか。

「そうじゃ。“天罰”が無理でも“異常気象”であれば有効であるう？ ワシは創造主じゃぞ、“異常気象”を創り出すくらいわけないわ」

何と言うか、本当に何でもありませんね。

「さあて、とりあえずは雷を落とすまでそれから富士山でも噴火させてやるかのう？」

悦に浸ってるトコ悪いんですが、さっきから何百発も雷落としてるのに一つも人に当たってませんよ。

「何じゃと!? 本当じゃ、雷がみな歩行者を避けておる」

神様の眼には群衆の信仰オーラがはつきりと見えていた。

「部下どもへの信仰心が愚民どもを守っているというのか……」
そのようですね、コイツはやっかいだ。

「クソッ、部下どもを直接どうにかせんとならんらしいな。よしッ、手下ども覚悟しておけええええい!!」

神様は部下の名前を次々と天に向かって叫んだ。

……何にも起こりませんね。

「奴らめ、ワシの言うことも聞かんとは！ こつなったらこの宇宙を全て消してやるッ！！」

ち、ちよつと待って下さいよ。あつちから何の返事もないなんて流石におかしいでしょう？

「ならば、どうなってるんじゃ？」

そうですね……… 信仰心？

そうですね、神様に人々の信仰心が届かなかったように、神様が部下さん達を信用してないから神様の声が届かないんですよ、きつと。

「ならばまるつきり打つ手が無いではないか。こつなったら………」

「直接接触攻撃による実力行使じゃ！！！」

人混みで暴れだす神様、群衆に殴りかかろうとする神様。

あちこちで拳がる悲鳴、鳴り響くサイレン。

駆けつける警察、捕まる神様。

静かに鳴り響く手錠の音。

「おい、こら。放せつ、放さんか！ ワシは神様じゃぞッ！」

「はいはい、詳しい話は署で聞こうな」

神様を乗せたパトカーが真っ赤な夕日を背にビル街へと消えていく。

*

「まったく、ひどい目にあっ たわい」

ここは宇宙の中心部。

天体が行き交い、消滅してはまた生まれる、そんな宇宙。

パトカーの中から急に消えましたからね、今頃地球の方じゃ大騒ぎになってるんじゃないですか？

「そんなこと知るか！」

……それより“天罰”はいいんですか？ ここなら地球を消すことぐらいはできるでしょう。

「確かにやろうと思えばできるが……」

できるが？

「なんかこう、また失敗しそうなの……」

確かにそう簡単に消えそうにないですよ、あの星。予想の斜め前に行くというか何というか。

「もう地球はいい、ほっとこう。ワシは疲れたのじゃ、もう寝るぞ」

神様がそう言うと宇宙は静かになった。

かくして我らが地球は神様の天罰の手から逃れることができたのであった。

【完】

「うるさいぞッ！ 静かにせんかッ！！」
だからナレーションに話し掛けないで下さいって！！

路地裏の神様（前書き）

> i 1 7 5 0 7 — 1 2 7 0 <

ジャンル：ハートフル

路地裏の神様

雨が、冷たい雨が降っていた。

道端でゴミ同然にうずくまる黒い塊は、その冷たい雨を浴びながら自分の最期を感じ取っているようだった。

もう、一歩も動けなかった。

何日食事をしていないだろうか。男はもはや空腹感すら忘れてしまっただけに体が麻痺していた。

眠たくて閉じようとする瞼を残る力で必死に開けて、虚ろな灰色の目は水溜りに落ちる雨粒を無感動に見つめていた。

どことも知れぬ場所で静かに死ぬのも結構なことかもしれない。

ふと、これまでの陳腐な生活の情景が自分の目の前で鮮明に流れて行くのが見えた。

ああ、これが走馬灯というやつか。さあ、名も無き路傍の石としてズタボロの人生に幕を閉じるとするか。

そのとき、突然雨が止んだ。

さっきまで容赦なく降っていた横殴りの雨が急に止んだのだった。だが、ザアザアという雨音はいまだに聞こえてくる。

何事かと思いい上を見ると、小さな女の子がいた。

その女の子はピンク色の可愛らしい傘を男の方に差し出していた。

「オジちゃん、どうしたの。そんなところに座って、びしょびしょだよ」

「……オジちゃんはね、帰る家が無くて倒れてたんだよ」

「倒れてたって、お腹空いてるの？ あたし、給食の残りのパンならあるよ」

男は少女が差し出す小さなパンに貪るように喰らいつき、擦れるような声で少女に礼を述べた。

もちろん、空腹が収まるわけではなかったが、何かを胃の中に入れることで多少は気分が楽になった。

「……お嬢ちゃん、ありがとう」

「オジちゃん、こんなところにいたら風邪ひくよ。あたしの家に来てお風呂でも入りなよ」

「……ありがとう。でもオジちゃんは疲れててね、もう一歩も歩けないんだよ」

「ふうん」

そう言うと少女は傘を差したまま男の傍の隣ににしゃがみこんだ。

「じゃあ、オジちゃんの元気がでるまであたしが一緒にいてあげる」

「……オジちゃんのことはいいいから、お嬢ちゃんは早くお家に帰りなさい」

「嫌。オジちゃんと一緒にいるんだもん」

男には少女の強引な要求をつき返すほどの元気もなく、そのまま少女の隣で力なく笑うしかなかった。

「オジちゃん、どうしてこんなところで倒れてたの？」

「オジちゃんは独りぼっちだからさ」

「ひとりぼっち？」

「ああ、誰もオジちゃんのことを信じてくれなくてね。みんなオジちゃんのことを鼻で笑うのさ」

「ひどいね」

「まあ、仕方が無いさ。信じてもらえないってことはオジちゃんは誰からも必要とされてないってことなんだよ」

「そんなことないよ」

少女は脹れっ面になり、男をキツと睨んだ。

「誰からも必要とされてないなんて、そんなこと絶対無い」

「同情はよしてくれ。その証拠にオジちゃんはついさっきまでみんなに見放されて死にかけてたろ」

「でも、あたしが助けてあげたよ。あたしは見放してないってことだよな？」

「それは同情だよ。きつとお嬢ちゃんもオジちゃんのことを信じてくれるはずがないんだから」

「同情なんかじゃないよ！　じゃあ、あたしがオジちゃんのことを信じたらいいの？　ね？」

少女の真っ直ぐな瞳に男は気圧された。一体少女は男の何が良くてここまで男の肩を持つのだろうか。

「じゃあ、オジちゃんがこれから言っことを信じられるかい？」

「うん」

「ふう、実はオジちゃんはね、『神様』なんだよ」

「……」

ふ、やっぱりだ。本当のことを言っても誰も信じてくれやしない。

おそらく少女の目には男が狂人として映っていることだろう。

汚い物を見るような目で、みんなと同じく少女もこの場を急いで立ち去ることだろう。

少女と男は沈黙を守り続けた。その沈黙を破ったのは少女の方だった。

「……やっぱり、神様だったんだ」

「え？」

「最初見たとき、何となくだけど他の人とは違う、そんな感じがしたの」

「で、でも、それは気のせいかもしれないよ」

「うん、そうかもしれない。でもね、オジちゃんが神様だって言うならあたしはそれを信じるよ」

少女は男の手を強く握り、男の目を見つめてそんなことを言った。少女の輝く瞳は決して嘘、偽りを語る者のそれなどではなかった。男は泣いていた。嬉しさや色々な感情が胸の中で熱く渦巻いて、涙が流れ出ていた。

「……ありがとう。お嬢ちゃん」

「オジちゃん？ どうしたの、オジちゃん？」

「どうやら、お別れの時間が来たようだ。お嬢ちゃん、君に会えて本当によかった……」

「オジ……ちゃん……？」

男の身体は光に包まれ、そして跡形もなく消え去った。

男の手を握っていた少女の手にはまだ温もりが残っていて、男は幻などではなかったことが分かる。

「そうか、神様だから天国に帰って行ったんだね。あ、雨が……」

雨が上がり、雲間から差してきた光が少女の頬の一粒の涙をキラリと輝かせた。

少女は知らぬ間に目から出ていた涙を拭い取り、傘を畳んで家路へとついた。

【路地裏の神様・完】

ここは宇宙の中心部。

天体が行き交い、消滅してはまた生まれる、そんな宇宙。

で、二度目の地球遠征に赴いたは良いが、今度は帰れなくなるぐらいまで信仰エネルギーを使い果たしてしまった、と。

「……はい」

……まったく、今回はたまたま特別天然記念物並みに純朴な少女から信仰エネルギーを得られたから良かったものの、こんなこと次は無いんですからね。わかりますか？

「……反省はしている。つまり省エネモードで地球に天罰を落とせばよいということじゃな」

ああ、やっぱりわかってない！　そういうことじゃないですって。安心しろ。あの純朴そうな少女に被害が及ばないような配慮はするつもりじゃ！　さあ、そうと決まればさっそく次の計画を練らねばの」

うつ、こんなんが神様で本当にいいのだろうか……。

「うるさい！　ナレーションが神様にケチをつけるでない」

宇宙は今日も順調に回っている。

博士の再生計画(前書き)

> i 1 7 5 0 8 | 1 2 7 0 <

ジャンル：コメディ

博士の再生計画

「どうだね、見たまえ田畑くん」

「なんですか？その試験管に入ってヌルヌルした液体は」

「フフフ、これぞ世紀の大発明だよ！　なんとだな…」

「また若返り薬ですか？」

とある研究室に一瞬の沈黙が流れた。

試験管を持って助手を睨む老博士、それを無視する助手こと僕、

田畑一朗。

「……田畑くん、話の腰を折らないでくれ」

「博士、これで何回目だと思ってるんですか？　103回目ですよ

！　しかも全て失敗。実験に付き合わされる僕の身にもなって下さいよー！」

「そうだったな。確か前回は肌がピチピチに若返る薬を飲んだが、逆に田畑くんの肌がピチピチに腫れ上がってて破裂しそうになったんだっただな」

そんなことを言う博士は遠い眼でどこかを見つめていた。

おそらく僕がピチピチのパンパンになって破裂しそうになったときのことを思い出してるんだろう。

あの時博士は笑っていた。始めは涙まで出して必死に笑いを堪えていたが、パンパンになった僕と目が合うと堪え切れなくなって盛大に笑った。

「ぶふお！」

……博士が今吹き出した理由が何となくわかる。

「博士。今のはピチピチのパンパンに膨れ上がった僕のことを思い出したんですね？」

「い、いや、ソナナコトはないぞ。君がパンパンに膨れ上がったときは本当に心配したん……うっハハハハハハ！ フヒヒヒヒヒ！！」

「笑わないで下さいよ！本当に死ぬかと思ったんですからね！」

「いや、フヒヒ。スマンスマン。君の必死な顔思い出したら笑いがハハハハ！まるで横綱みたいで……フヒツ、まあいいじゃないか。この私が天才的な頭脳を駆使して治してあげたんだから」

「時間が経ったら自然と元に戻っただけですけどね」

「あれ？ そうだったか？ ワハハハハハハハハ！！！」

博士の笑い声で研究室の建物がひどく揺れた。

研究室のある地域で震度1の地震が観測されたのだがそれはまた別のお話。

「博士、いい加減に笑うのをやめてください」

「うむ、いいだろう。ちょうど笑うのにも飽きてきたところだ」

そう言いながら、さっきの地震で頭上に落ちてきたフラスコを拾う。

博士の頭は落ちてきたフラスコのせいで漫画のようなコブを作っていたがそんなことはどうでもいい。

「田畑くん、どうでもいいとは何だね。どうでもいいとは。これ痛いんだよ、すごく」

「何でアンタは僕の考えてることがわかるんですかッ！」

この人は謎だ。この話はこのままエスパー物にした方がいいかもしれない。

「エスパーとか何とかは置いて、本題に入ろうか田畑くん」

「……もういいですよ。突っ込むのも疲れしました。で、本題っつい

うのはもしかしてまた僕がその薬の実験体になるんじゃないでしょうね？」

「よくわかったな、その通りだ」

博士は薬の入った試験管を僕に向ける。

「いやですよ。もうあんな危険な目はこりこりです」

「そうじゃな、では今回は私が飲むとしよう」

「！？ ちょっと待って下さいよ！ それで博士が死んだら真っ先に疑われるのは僕じゃないですか」

「ええい、うるさいわッ！ この天才様が失敗なんてするわけないだろ。成功して、若返って、ギャルにモテてハッピーエンドじゃ」「せめて遺書ぐらい書いてください」

僕が必死に止めるのも聞かずに、博士は試験管に口をつけて一気に流し込んだ。

試験管の液体は博士の口の中に滑るように入ってしまった。

「うっ、うがッ！」

すると、博士は呻きながら床に倒れこんでそのまま動かなくなつた。

*

ああ、どうしよう。

僕は明日から犯罪者の汚名を来て生きていけないといけないのか？

『老博士、謎の死』

『犯人は助手』

『田畑一朗容疑者（27）はフラスコで被害者の後頭部を殴り、薬』

品で殺害。動機は……」

明日の新聞記事が頭の中を駆け巡る。

……そうだ、事件になる前に埋めてしまおう。確かスコップは倉庫にあったはずだ。

「おいおい、死体遺棄は立派な犯罪だぞ」

僕がいそいそとスコップを探していると、後ろに先程死んだはずの博士が立っていた。

「ひいい、ゆ、幽霊!？」

「馬鹿モン！ ちゃんと生きとるわい。ほれ、足もちゃんとある。だがちよつとあの薬は不味かったな。あまりの不味さに気絶してしまつたわい」

気絶するほどの不味さつてどれだけ不味いんだよ、と思いながら僕は無罪ということに胸を撫で下ろした。

「てことは結局失敗したんですね」

目の前の博士は以前と全く変わらず、少しも若返つてなどいなかった。

「うむ、失敗したはずないんじゃが……」
「うわっ！ 博士、髪が！」

僕は目を疑つた、博士のツルツルの頭から黒々とした髪が生えてきたのだから。

それは驚きだった。僕が博士に初めて会ったときからその頭は日光に照らされてキラキラと輝いており、その輝きが失われることなど夢にも思わなかったからだ。

「おおっ、やつたぞ田畑くん！ 戦火を越えた焼け野原に新たな命

の息吹が芽生え始めたぞ」

「下らないこと言わないでください。それになんで若返りの薬が毛生え薬になるんですか」

「馬鹿モン！ ツルツルよりフサフサのほうが若々しいだろ。そんなことも分からんのか」

「そういうことじゃありませんよ！ それにしてもいつになったら止まるんですか？」

そう、僕たちがワイワイと騒いでいる間も、博士の髪は止まる事無く伸び続けている。

小野小町もびっくりするぐらいの長髪になった博士は正直言っ
て気持ちが悪かった。

そして怖ろしいことにもう僕たちの足元は博士の髪で埋まっ
ている。

髪の毛はまだまだ伸び続け、もう部屋は博士の髪で埋め尽くさ
れてしまっそうだ。

「いやー、ここまで伸びるとまるで漫画だなハハハハ」

「笑い事じゃありませんよ！ 髪の毛で溺死なんて僕はいやです
よ！」

髪の毛はまだまだ伸び続け、もう部屋は博士の髪で埋め尽くさ
れてしまっそうだ。髪の毛で溺死、これもあながち嘘ではなくなる
のではないか。

「まあまあ、こつも漫画みたいなんだから漫画のセオリーに沿え
ば解決するんじゃないのか？」

「漫画のセオリー？ 確かに昔こんな感じの漫画があった気もしま
すが。漫画みたいにするなら抜け薬っていうのが妥当なところだ
かね」

「そつか、抜け薬か」

「あるんですか？ あるなら早く使って下さいよ！ もう髪が肩まで来てるんですから」

「いや、ない」

その瞬間僕の右足が博士の腹部を捉えた。

「蹴りますよ」

「イタタタタ、蹴ってから言わないでくれ。まあ、そんなに怒らな
いでくれ。抜け薬がないなら作ればいいじゃないか」

「じゃあ早く作ってください！ ああ、口の中に髪があああああ
「任せておけ！ 私は天才的な科学者だぞ……って髪の毛で前が見えない。実験器具はどこだ！」

「もがもごご！ もごごむもぎがもごご！ もごごご？ もごごもごごご？

（馬鹿野郎！ もつやっつてられない！ ドアは？ ドアはどこだ？）
」

髪の毛で窒息しかけた僕は、薄れ行く意識の中、何とか研究室の
ドアを打ち破り無事生還することができた。

あえて博士を助けよう、などという考えが1ミリも浮かばなかつたのは正常な判断だったと思う。

*

「それにしても、すごい量の髪の毛ですね」

地面に広がる抜け毛の残骸を見ながら僕はつぶやく。

博士の髪の毛はあれから三時間ほど伸び続けた。

最終的に髪の毛は研究室だけでは収まりきらないボリュームだった
ので、隣の研究室や隣接する大学や食堂にまで伸びてしまったそ

うだ。

不幸なことにその髪の毛の残骸については知らぬ存ぜぬを突き通そうとしたのだが、他の研究員の密告により晴れて研究所長から残骸の片づけを仰せつかったのであった。

「博士、そんなところでシヨげてないで髪を片づけるのを手伝って下さいよ」

僕がそういった先には頭が以前と同じツルツルの博士が体育座りでうつむいている。

幸いなことに、博士の髪の毛は伸びるとこまで伸びたあと、自然と抜け落ちたのだ。

当然、博士の頭には一本も残っていない。

「いいじゃないですか、もともとハゲだったんですから。」

「お前に私の悲しみがわかるのか？ フサフサになってスナックの若いネーチャン達にモテモテになるといふ崇高な計画が崩れ去……ぐはぁ！」

僕の右足が博士のアゴを捉えた。

「蹴りますよ」

「イタタタタ、だから蹴る前に言ってくれって」

「さっさと手伝ってください。一人でこれだけ集めるの大変だったんですから」

「そうだな、私が悪かったよ。よしッ、田畑くんはこのスポーツドリンクでも飲んで休憩してくれ、残りは私がやるっ」

「博士もいいトコあるんですね」

そう言いながら僕はベンチに腰掛けてスポーツドリンクを喝いた喉に一気に流し込んだ。

「いや、田畑くんにはずいぶん迷惑を掛けたからね。ところでそのスポーツドリンクはどうだい、美味しいかい？」

「ええ、すごく美味しいですよ」

「ならよかった。改良を加えたおかげだな」

「え！？ も、もしかしてこれって……」

「その通りだ、味に改良を加えた若返りの薬さ！」

まさかの事実血の気が引いていくのがわかった。
クソツ、博士を信用した僕が馬鹿だった。

「また毛生え薬ですか！？ あんなにフサフサになって喜ぶのは博士だけですよ」

「いや、今度のはちゃんとした若返りの薬だ。それに分かったんだよ、私より君のほうが実験体に向いてるってこと……ぐへえ！」

「殴りますよ」

「だから、殴る前に言えって言っただ……ぐはあ！」

「ちくしょおおおお！ この馬鹿博士がッ！！」

「おや、田畑くん。声が高くなってきているぞ！若返ってきてるんじゃないのか！？」

「うるせえええええ！！！！」

とある研究室は今日もまた騒がしい空気に包まれた。

【完】

「はあはあ、血に包まれるかと思ったよ、田畑くん」

「待てええ！ 逃げんな！」

博士の作ったスポーツドリンク風の薬はヘリウム程度の効果しかもたらさなかった。

だが、僕の声はずーとハイトーンのまま、逃げ回る博士を高い声のまま三日三晩も追いまわす羽目になったのだった。

はぐれ教師、熱血派(前書き)

> i 1 7 5 2 5 | 1 2 7 0 <

ジャンル：コメディ

はぐれ教師、熱血派

僕たちの学校には某先生という変わった先生がいるんです……。

【朝のHR】

「えー、三十、四十にもなってポケモンマスターを目指すとか言わないように。先生が言いたいのはこれだけです」

生徒「起立、礼」

「はい、おはよう。それじゃ授業始めるとするか」

【1限目・数学】

「今日は数学の岸原先生が謎の失踪のためお休みだから先生が授業します」

「えー、メラネウスの定理が…いや、メネラウスか？メウネラス？」

「えー、このメむにゃむにゃウスの定理により……」

「あー、もう後は答え見てください。解答が一番正しいはずですよ」

生徒「ちゃんと授業して下さいよ……」

「いいんだよ、数学なんて世の中に出てからも役に立たないから」

「足し算、引き算とあとスーパーの割引計算さえ出来れば生きていけるからな」

生徒「……………」

【2 限目・現国】

「現国の大樫先生も昨日から行方不明なのでこの授業も先生がやります」

「はい、それじゃ教科書開いて。えー、『メロスは激怒した』」

「……………」

生徒「先生、さっきから黙ってどうしたんですか？」

「ちょ、今いいところだから話し掛けないでくれ」

「んー、このメロスって奴ひどいよな。いくら疲れたからって今にも死にそうな友人見捨てて寝るなんてな」

「えー、みんなもメロスみたいに途中で挫折しないように」

「……………」

生徒「先生……………」

「ああすまん、読み耽ってた。それにしてもこの友人も結構お人好しだよな……………えー、セリ又又ティウス？ セリ又ンティス？ セリ、

セリヌ……」

「あー、とにかくメロスとセリヌによごによごのウスの友情パワーで暴君を倒しました。はい、授業終わり」

【3、4 限目・体育】

「はい、体育は先生の担当だからな。いつも通り授業するぞー」

「えー、女子の体育担当の黒井先生も姿を消しているので、今日は男女合同で授業するぞー」

生徒「男女合同で何するんですか？」

「水泳です」

生徒「え？」

「うっひょひょひょーい！ おい騒ぐな男共、いくらプールが嬉しいからってはしゃぐなよ！」

「水着！ 水着！ み・ず・ぎ！ うひゃひゃひゃひゃ」

生徒「……………」

「おーし、準備体操するぞー。おいおい、男共みんな前かがみになつてたら体操できないだろ」

男生徒「……………先生も十分前かがみなんですけど」

「先生はいいんだよ、先生は。前かがみになってないと女子生徒達がみんな引いてしまうだろうが！」

男生徒「……もう十分ドン引きされてますよ」

「え？ 本当だ！ 女生徒達の視線が痛い」

女生徒「……………」

「いや、ちょっと待ってくれ！ 先生は何にもやましいことなんか……………」

先生は前かがみになるのをやめて、女生徒の方へ走り出した。

女生徒「きゃあああ！」

「え？」

男生徒「通報しますた」

くプールく

「むふふふ、最近の女子高生は発育がよくて……………」

男生徒「……ちゃんと授業して下さいよ」

「ちょっと待て、お前達には男のロマンが分からんのか。濡れたスクール水着が映し出す美麗なボディライン、白日の下に晒された脚線美。ああ、スク水最高おお……………バタッ」

「じゃ、リスニングやるぞー。えー、ラジカセのボタンを押してとっ……」

ラジカセ「……Question No.1・Hey, Tom! What are you……」(問1、やあ、トム！ な、何をする貴様……)「」

「……コクンツ……コクンツ……」

ラジカセ「Oh! Mary! You have a very bad smell……」(おい、メアリ！ 君、何かすごい臭うんだけど……)「」

「……ZZZ……」

ラジカセ「Get out of here, Mr. Koike! I hate you!……」(出て行きなさいよ、バカ小池！ べ、別にあんたなんて好きになるわけないじゃない!)「」

「……むにゃ……スク水おかわり……ZZZ……」

生徒「……」

【6 限目・化学】

「えー、さっきの授業で寝るなどのご指摘がありました。残念ながらあれは狸寝入りです」

生徒「……」

「嘘です、すいません」

「えー、今日最後の授業となりましたが、例のごとく化学の守山先生も一昨日から帰っております」

「そうです、また先生がやるハメになりました」

「正直に言つと、これは先生の意志じゃないです。すべては校ちょ……」

そのとき、先生は隣の校舎の屋上で校長と教頭が無線機を操作しているのに気付いた。

（もしや、この教室に仕掛けられた盗聴機でこちらの会話はすべて筒抜け？）

（なら、下手なことは喋れないな……給料減額の恐れがある）

「……えー、今日の授業はすべて先生が勝手にやったことです、とこれで大丈夫かな」

「じゃ、化学は実験するぞー、実験」

生徒「なんか先生のことだから爆発とか起きそうなんですけど……」

「いやー、さすがに大丈夫だろ。食塩とか使った簡単な実験だし」

ところが先生がビーカーの中に食塩を入れた瞬間……。

ドオオンッ！ という爆音が学園中に木霊した。

【隣の校舎の屋上にて】

校長「何事だ!？」

教頭「どうやら実験室で爆発が起きたようですね」

校長「また、某先生か……今度は減給どころじゃ済まないぞ」

校長の目には実験室からグラウンドに逃げ出した生徒達が飛び込んできた。

校長はグラウンドへ凄いスピードで走って向かった。

ハゲでデブの校長だが、こう見えても学生時代は神速のチーターと恐れられた陸上選手だったのだ。

しかし、そんなことは本当にどうでもいい。

【グラウンドにて】

校長「おい、君たち。大丈夫か!？」

生徒「ケホッ……僕達は大丈夫ですけど、まだ中に逃げ遅れた生徒と先生が!」

校長「何い!」

教頭「校長、消防隊を呼びましたが渋滞で遅れるそうです!」

校長「クソッ、わかった。君はまず全校生徒達を避難させなさい！
他の校舎にも火が回る危険性がある！」

教頭「わかりました！」

火の回りは思った以上に早く、もはや消防隊の到着を待つしかなかった。

校長「くそッ、某先生のヤツどれだけ不祥事を起こせば済むと思ってるんだ！」

生徒「校長先生、それは違います！」

校長「何が違うというのだ。あんなヤツは教師失格だ、失格教師だ！」

生徒「違います、先生は一生懸命なだけなんです！」

生徒「先生はバカでドジでちょっと変態だけど、いつも僕達生徒のために一生懸命頑張ってるんです！」

生徒「さっきだって先生は身を呈して爆発からみんなを守るうとしました！」

校長「……………」

生徒「だから、だから先生を信じてください！」

校長「君たち……」

教頭「おお、実験室の方から誰か出てきました！」

校長「何！」

そこには燃え盛る実験室から命からがら脱出した某先生と某先生に抱えられた数人の生徒達がいた。

生徒「せ、先生！」

「おう、こいつらを守りながらだったからちよつと時間が掛かってな」

生徒「大丈夫ですか、先生！」

「大丈夫だ、みんな大した怪我はしてないからな。女生徒Aも足挫いただけだし」

先生は背負っていた女生徒Aを下ろしてそう言った。

生徒「でも先生の足……」

「ああ、これか？　ちよつと逃げてるときにな……」

よく見ると先生の右足は血を流して腫れ、見るだけでかなりの重傷だとわかった。

生徒「先生、どこが大丈夫なんですか！　折れてるかも知れませ

んよー!」

「先生はいいんだよ、先生はな。お前らが無事ならそれでいいんだよ……」

保健医「いーわけないでしょ!」

「ぐはッ!」

突如現れた学園のマドンナ、美人保健医が重症の某先生に飛び膝蹴りを喰らわせた。

保健医「ほら御覧なさい、ちょっと触っただけでこの通りよ。これは絶対折れてるわね」

「あ、保健医さん……もう少しやさしく触って下さいよ。もっとエロやさしく」

保健医「うるさいわね。鼻血に骨折、あなた一日に何度怪我すればいいの?」

「い、いや……俺は大丈夫ですよ……ほら、だいじょーぶ……」

保健医「問答無用よ。ほら、担架来たわよ。あなたもいい歳なんだから意地はらないの、ね?」

「……わかりました」

美人保健医に言われて先生はおとなしく担架に乗り、そのまま担

ぎ込まれた。

そしてその担架には生徒や他の先生たちが心配そうに駆け寄って行った。

校長「某先生……」

「あ、校長先生。えー、すみません、実験室あんなにしちゃって」

校長「いや、それは気にせんでいい。それにしても某先生、君は善い生徒を持ったな」

「ははは、あいつらは俺の誇りですからね」

そう言うと先生は救急車で運ばれ、サイレンの音はだんだんと小さくなっていった。

【その後日、病院にて】

先生の骨折は命に別状はなく、先生の病室には毎日見舞い客が訪れた。

生徒「結局、あの爆発はなんだったんですかね」

「あー、警察の調べでもよく分からいらしいからな。まあでも、そのおかげで先生もクビにならずに済んだからな」

生徒「熱血教師の救出劇みたいな感じで世間の注目も集めましたね」

「それに警察から表彰。いやー、やっぱり先生の正義感にみんな曳かれるんだな、うん」

保健医「『看護婦さんが美人でラッキー！うひゃひゃ』とか言ってた人のどこに曳かれるんでしょうね？」

「ああ、保険医さん！それは言わないで下さいよ」

生徒「ははは、そっちの方が先生らしいですよ」

のどかな談笑が病室を包み込む初夏の昼下がりに。

今日も某先生のまわりはいつも通り順調に回っていた。

でも、看護婦さんのお尻を触った某先生が、保険医さんにボコボコにされて入院が一カ月延びてしまったのはまた別のお話。

菜の花畑でつかまえて（前書き）

> i 1 7 6 5 8 | 1 2 7 0 <

ジャンル：コメディ

菜の花畑でつかまえて

鍵の壊れた屋上の扉を開くと、ただぼんやりと空を眺める新藤がいた。

「……………」

「おい、新藤。あんた授業サボって屋上で何してんのよ？」

「……………高木か」

「あたしの質問は無視か」

質問を無視したまま新藤は物憂げな表情で向こうの方を指差した。

「俺が何をしていたかはこの際取るに足りない問題だ。そんなことよりアレを見てくれ」

「アレって、菜の花のこと？ 春の風物詩じゃん」

「冬に咲くヤツもあるけどな」

「……………へえ」

「……………」

「……………」

「……………」

「あんた、何か喋りなさいよ」

沈黙を続ける新藤に痺れを切らし、あたしが口を開いたその瞬間、キンコンと授業開始のチャイムが鳴ってしまった。

「げっ、やばい。新藤、早く教室戻らないとまたサボりになるよ」

「……………なあ高木。菜の花があるだろ」

「あんた本当に人の話聞く気ないでしょ」

時計と新藤を交互ににらみあたしのことなどどこ吹く風で、彼はマイペースに話を続けた。

「どうやら『菜の花』とは英語で『レイプ』と言っらしい」「え!？」

「しかもスペルまで同じだそうだ」

「う、嘘でしょ」

「真実とは残酷なものなんだよ」

「そ、そんな……」

あたしは啞然とした。

もちろん新藤の口から発せられた驚愕の事実に驚いたのもあるが、それが突っ込みにくい下ネタであったことが状況をさらに悪化させた。

「……」

「……」

「気まずいな」

「あんたのせいでしょ!」

新藤にあたしの飛び蹴りが命中したその瞬間、授業終了のチャイムが鳴ってしまった。

「俺の地元にな『菜の花の道』っていう土手があるんだよ」

「まだ菜の花の話は終わってなかったの?」

「英訳すると『レイプロード』だな」

「……」

新藤もあたしも沈黙を始めた。あたしは新藤に呆れてものが言えなかったのだが、新藤の方は何やら不潔な妄想を始めているらしいか

った。

「フヒヒ……」

「……」

「ハツ……。なあ高木、さっきからその冷たい視線が気になるんだが」

「さすがのあたしでもフォローのしようがないわ」

「え」

新藤は戸惑った顔をするけれど、あたしは決して目を合わせることはない。そしてチャイムは無感情に放課後の到来を告げる。

「もう放課後か」

「あんたのせいで時間を無駄にしちゃったわね」

「お前までもが授業をサボるとはな」

「あんたは痛い目を見ないとわからないようね」

あたしの腕が新藤の首をがっしりと捉えキリキリと締めあげた。すると新藤は蟹のように泡を吹いたのであたしはその手を緩める。

「大体、何であんたは授業をサボるのよ？ 絵に書いたような不良

少年じゃあるまいし」

「それは……」

「え、何なのよ。はつきり言ってくれないと聞こえないわよ」

ふと気が付いたら新藤の、そのいつになく真面目な瞳があたしを捉えていた。そして次の瞬間、新藤の口から出た言葉にあたしはドキリとした。

「それはお前がきつと来るって思ったからだよ」

「え」

「高木、お前と、そう二人きりになりたかったんだ」

「そ、それって」

「好きだ」

予想もしなかった愛の告白にあたしは心底戸惑って、そのまま足をふらつかせてしまった。

「あ、危ない！」

転けそうになったあたしを新藤がとっさに抱えあげる。

「大丈夫か？」

「か、顔が近いよ。それに……」

「それに？」

「いつもの変態な新藤じゃないみたい」

「たまにはこんな真面目な感じの俺もいいだろ？」

「ばか……」

体が近いと新藤の鼓動が聞こえてくるみたいで、あたしの心臓もドキドキとこれまでにないくらい脈打っている。

身体が熱くなって、気が付けばどちらともなく唇を合わせていた。長い長いキスの後、新藤はそのままあたしを押し倒した。春の日差しに照らされたコンクリートの温もりがやんわりとあたしの背中に伝わってくる。

「ん……」

あたしはじつと目を瞑って新藤を待った。ひたすら待った。けどちょっと待てよ。いくら何でもこれは待ち過ぎじゃないだ

るうか。さつきまで温かった背中コンクリートも随分ひんやりしてしまった。

あたしが恐る恐る目を開けるとそこには真剣に何かを考えているようだ。

「あのさ、どうしたの？ そんな渋い顔して」

「いや『菜の花畑で捕まえて』は『キャッチャー・イン・ザ・レイプ』になるんだろうが……」

「……」
「だがもしも両者が合意の上で、それも菜の花畑の中で事をいたすのだとしたら何か違和感をオフツ！」

新藤の持論を最後まで聞くことなく、あたしは新藤の股間を思い切り蹴り上げた。

新藤は声にならない悲鳴を上げながら勢い良く屋上を転がり回った。

春、それは変態の季節。

新藤は今年もその道を爆走しそつだ。

そして春は恋の季節。

だけど、あたしの春はいつも一筋縄じゃ行かないよつだ。

K · S B L U E (前書き)

> i 1 7 7 6 0 | 1 2 7 0 <

ジャンル：恋愛もどき

少年、いや背の低い青年が水の上に浮いていた。

別に水難事故とかそういうもんじゃない。

どうもあれは彼の趣味というか日課のようなものなのだ。

日がな一日中、私たちは退屈で、安っぽくもかけがえのない生活を営んでる。

というのに、私が見るかぎり彼はいつも水の上をプカプカと漂っている。

教室の窓から見える、プール上の彼は実に気持ちよさそうだ。

彼は水の上に浮かんだまま居眠りをしてたから、おそらく気持ちいいんだろう。

さて、私は彼が誰かを知らない。

どうやら同い年に見えるがウチの生徒ではないようだ。

ウチの生徒ではないのに誰も通報なんてしようとしなない。

おそらく、もうこれが日常風景になっちゃったんだろう。彼がプールに浮かんでいるのが普通なのだろう。

授業がつまらないので名前も知らない彼の観察日記をつけてみることにした。

だけど一週間でやめた。

彼は毎日同じようにプールの上に浮いているだけなのだ。それ以外は何もしていない。

飽きっぽい私でなくても七日続けて同じことをノートに書き続けるのは苦痛というものだ。

非現実で、それでいて退屈そうに見える彼の生活は私には不思議なものに見えて仕方がない。

だから、私は彼に並々ならぬ興味を持ってはいる。

しかし、積極的に接触を持つつもりはない。

それはみんな同じようである。目の前の非現実なんてものは見ようとしても見えないようになってきているようだ。

しかし、心のどこかで彼と話してみたいとも思っている。

これが複雑なオトメゴコロというものなのだろうか。

ある日の帰り道、近所の川に彼が浮いていた。

道行く散歩のオジさん、オバさん、若者たちは見向きもしない。

現代人にとって彼ぐらいの小さな刺激では物足りないのだろうか。

私もいつものように彼の方をちらりと一瞥してそのまま先に行こうとした。

しかし、突然なんだか奇妙な音が聞こえてきてどうもそれが耳についた。

そしてその音は鳴り止む気配はない。

彼の方をしてみる。

やっぱり案の定、謎の音の原因は彼のようだ。

これは彼のお腹の音だろう。

どうやらお腹が空いているようだ。

そのまま通り過ぎるのも何だか申し訳ない気がして、私は鞆から昼食の残りのチョココロネを取り出して川岸に近付く。

「おーい、君」

そう彼に呼び掛けると彼は私に気づいたようで、私がいる岸まで泳いできた。

私がパンを差し出すと、嬉しそうに手を伸ばしてそれを掴む。

川から上がる様子もなく、彼はそのまま水上に浮いたままでコロンネに齧りついた。

美味しそうにチョココロンネを頬張りながら、水から出ようとしな
い彼を私は微笑ましく見つめる。

「美味しいかい？」

私の質問は彼には全く届いてないようで、私のことなど気にする
様子もなく夢中でコロンネを食べている。

観察日記は三日坊主で終わってしまった私だがよくよく彼を見て
みると意外な発見がある。

彼は全体的に青いのだ。

その髪は光の加減で瞳と同じ美しいダークブルーの輝きを放ち、
その白い肌を透けて見える静脈は優美ささえも感じさせる。

ああ、綺麗。

私は今までこんな美しさに触れたことがあっただろうか。

今まで私が惹きつけられていた彼の魅力というのは、この全てを
包み込む青さなのだろう。

海の青さと空の青さと異なるその青さに私の心は奪われてい
ったのだ。

だけどそんな美しい彼が私に振り向くことはないだろう。

彼と私は住む世界が違う。

彼には触れられない、触れてはならない。

初めて間近で彼を見て、そう思わずにはいらなかった。

そう、これは叶わぬ恋なのだ、決して触れてはいけない恋なのだ。

「一体君は誰なんだい、私をここまで奮わせる君は」

私は彼に届くことがないと分かりながらもため息混じりに呟いた。

見ると彼はもうチョココロネを食べ終えていて、私の方を向くと目眩がするくらい綺麗な笑顔でニコリと微笑んだ。

「ありがとう」

彼の口から出た言葉に一瞬驚いて、驚きが止まる間も与えられないまま私の唇に何かが触れた。

チョコレートの良い香りが口の中に広がった。

冷たい唇の感触はすぐに暖かくなって、時間が止まった。

私は静かに目を閉じた。

チョコレートより甘い何かが私の胸の奥から湧き上がってきた。

それとは対照的に、乾いた心の歪みに暖かい水が流れ込んで、ゆっくりと奥の方に染み込んでいく。

小さな襞と襞の隙間にもじわじわと染みてきて、暗く黒い何かの奥の方から押し出される。

私は今、青に染まってる。

心が、体が潤されていくのをはつきりと感じた。

私はゆっくりと目を開けた。

目を開けると彼は川の中に立っていた、私は岸边でしゃがんでいた。

さっきまでの感動は夢だったのだろうか。

夢のような世界が終わりを告げた、そうだと思った。

別れの時が来たのだ。

現実へと私は引き戻されていく。

彼と別れたくない、夢ならば覚めないでほしい。

私の両目からは涙が溢れだしていた。
そんな私を見て彼は岸の上の私に手を伸ばした。
彼の手がやさしく私の目元を拭う。

「さよなら、……」

そう言つと彼の姿は消えた。

その言葉の最後、彼は何か口を動かしたけど残念ながらその声は私には届かなかった。

彼が拭ってくれた目元がまた少し濡れてきた。

「はるこー、何してんのー」

後ろの方から私の名前を呼ぶ夏樹の声が聞こえる。

どうやら私は現実に戻ってきたようだ。

もう彼はいない。

そして彼は私以外の誰にも見えなかったのだ、そう、初めから。
私にしか見えない彼の最後の言葉が音となって私に届くことはなかった。

だけど、あの時、彼が何と言っていたかははっきりとわかる。

「ううん、なんでもない」

涙を拭って、私は同級生の方へ駆け寄る。

背後の川の向こうではもう夕日が掛っていた。

彼の面影を追いながら山の青い影を見つめる。

その青さは夏樹には分からない、道行くオジさん、オバさんにも

分からない。

私にだけ分かる彼の青い幻影。

さよなら、私にしか見えない私の好きな人。

そして、またいつか。

理想的な生活（前書き）

> i 1 7 7 8 9 | 1 2 7 0 <

ジャンル：ショートショート

理想的な生活

午前5時ちょうどに寝室から機械的な電子音が鳴り出す。

布団の中から生えた右腕が音源のまわりを弱々しく叩き出し、5分後にようやく目覚まし時計に触れる事が出来た。音が止まって少しの間、もそもそしていた布団は動きを止める。

だがすぐに中から中年の男が出てきて枕元に置いてあった眼鏡を手にとって掛ける。

顔を洗い、身支度を整えてから食卓に向かうとすでに妻が朝食の支度を済ませていた。

男と妻は互いに朝の挨拶をし、男も食卓についた。

新聞を読みながら味噌汁を啜っていると、妻から行儀が悪いと諭されたので大人しく新聞をたたみ食事に専念する。

男が食事を済ませたとき、ドアの向こうから寝呆け眼の息子がやってきて男と妻に朝の挨拶をする。男と妻は息子に挨拶を返した。

男は一通り新聞を読み終わると時計を見、スーツの上着を着て家を出発する。

妻と息子がそんな男を見送った。

男の自宅から徒歩五分もしないところに地下鉄の駅があり。男は改札を抜けてホームの列に混じった。

列車が来るといつもと同じように3号車のホーム寄り右側の吊り革に捕まり扉が閉まるのをじっと待つ。

電車の発車ベルが聞こえると音を立ててドアが閉まり、電車の車

輪が動き出した。

男の勤める会社はここから電車で30分のところにある。

だが、近くの駅で通勤・通学の会社員や学生が大量に乗り込んでくるので30分も満員電車で揺られなければならない。

息が詰まる満員電車の中、男は左足を踏まれしばしば痛い思いをしているのだが、それでも目的駅までなんとか我慢している。

30分近く満員電車で揺られてようやく目的の駅に到着した。

人混みに流されるように改札を通り地上に出る。地上に出ると目と鼻の先に男の勤め先があつて、男はいつも通りに会社の門をくぐつた。

男の働きぶりは真面目だが、とりわけ高い地位にいるわけでもなく、かといってそんなに低い地位にいるわけでもない。

仕事も普通にこなし、給料もそこそこ多く貰つており、妻子を養うには十分だった。

同僚たちとの関係も悪くはなく、今日も仕事終わりに飲みを誘われたので快く承諾する。もちろん普段は男の方から飲みを誘つことだつて少なくはない。

仕事が終わるとそのまま行きつけの居酒屋まで行って真っ暗になるまでワイワイと飲んでいた。

終電になる前に散会し、男は寂しい深夜の地下鉄の駅で同僚たちと別れる。

改札を抜けると、ちょうどいい具合に電車が来ておりそれに乗る。空いている座席を探す必要もないくらい電車内はガラガラで、男は長椅子のど真ん中に腰を下ろした。

朝とは違ってガラガラの終電前の電車の中、彼は一日の疲れを吐きだすようにゆっくりと深呼吸をした。

窓ガラスを見ると自分の老けた顔がよく映った。

二十代の時の情熱はもう薄れてしまい、燃費の悪い体で何とか頑張っている。だが、気力そのものが無くなってしまったわけではない。

つまり男も人並みに年を取ってしまったということだ。

家族との関係も仕事もこれと言って問題は無く、むしろ良好と言えるほどだ。

平凡ながらも楽しい毎日、これはこれで十分満足していた。

「しかしまあ、たまには刺激的なことでも起こらんものかな」

男は窓ガラスに移った自分の顔を見ながらふとそんなことを呟いた。

駅から自宅までの帰り道、良い気分で歩いていると背後から急に呼び止められた。

「すみません、ちょっといいですか」
「なんですか、一体。こんな暗い中」

男が振り向くと、そこにはスーツを着た男性が立っていた。彼はスーツを着てはいるもののどうしてもサラリーマンには見えない。

「いえ、私はとある大学の研究員をしましてね。実はここ数日あなたの生活を観察させてもらっていたのです」

「私の生活を？ひどいな、まるでストーカーじゃないか」

「いやいや、誤解しないで下さい。私は決してそんな怪しいものではないんです」

見るからに怪しいその男は懐から名刺を一枚取り出した。そこには知らない人はいないという超名門大学の名前が書かれており、その下には総合生態学研究所と太くはつきりと印刷されていた。

「信じかねますね、そんなことは」

「まあ調査の内容を聞いてください。実はですねあなたの生活はなんと私どもが追い求めていた“理想的な生活”そのものだったので」

「理想的な生活？ 私の生活が？ そんな馬鹿な、私はこれといって特別なことはしてませんよ」

「いえいえ、あなたほどの理想的な生活はなかなかありませんよ。私どもあなたのような方をずっと探していたのです」

その研究員が男を随分とおだてたため、酔いも手伝ってか男の警戒心はすぐに解かれた。

超名門大学のお墨付きと言うこともあり男はかなりの上機嫌にな

った。

平凡な日常の中で、人に誉められることがこんなに嬉しいことだとは男も思ってもいなかった。

「そうですか？　なんだか嬉しいな。それにしても私の生活が理想的だとはね」

「そうです。あなたの生活は実に理想的な“平凡な”生活なのです」

研究者の言葉に男は一瞬、耳を疑った。

「今何て？」

「理想的な“平凡な”生活です。私どもは現代人の生活について研究しておりましてね、あなたのような典型的とも言えるくらい平凡な人は絶好のサンプルなのです！」

「はあ……」

男はさつきまで上気していた血液が一気に冷めて行くのを感じていた。

「つきましてはですね、今度は正式にあなたの生活を調査させていただきます。もちろんお礼は十分させていただきます」

「いえ、結構です、やめて下さい。それじゃ」

男は研究者の頼みをすぐに撥ねつけ、とぼとぼいつものように自宅へと帰った。

自宅に帰り、明日もまた平凡な毎日が始まるのか、と考えた男はなにやら複雑な気持ちになった。

裸の王様(前書き)

> i 1 9 3 6 0 | 1 2 7 0 <

ジャンル：童話的文学

裸の王様

その昔、どこか遠くの国に一人の行商がいました。

行商はその国の若い王様に会いに行き、鞆から服を一着取り出しました。

これがいわゆる「馬鹿には見えない服」だったのです。

王様は大金を出してその服を買い、行商はホクホク顔で城を出ていきました。

しかし、この王様は昔話にあるような愚直な人物ではなく、むしろ賢くユーモアに富んだ人でした。

そんな王様ですから、一種の余興や娯楽品として「馬鹿には見えない服」を買ったのです。

もちろん王様にも行商にもその服は見えません。

さて、王様は早速その服を纏って城下街に繰り出しました。

それはもう金かったパレードで、国一番のテーマパーク・ネズミーランドのパレード隊をそのまま呼び寄せました。

花火が上がり、馬車隊が列を連れ、楽器隊がにぎやかな音楽を鳴らす中、王様はパレードの先頭で胸を張って更新していました。

そのパレードを一目見ようと、多くの人がどんどん集まって来ました。

人がぎゅうぎゅうに群れているものだから、人の波に押されて一人の男の子が王様の前に転がり出しました。

そしてその男の子は王様に向かって

「可らしいや、この王様、真っ裸でやんの！」

と言って、ゲラゲラと笑い転げました。

当の王様は怒る様子もなく

「わははは！面白い子供だ」

と笑つて、男の子に金貨の入った小袋を投げ渡したのです。それを見た人たちは驚きの声を挙げ、そしてみんな男の子と同じように大きな声で笑い転げました。

王様は馬車隊に命令して大量の金貨をバラ撒かせました。人々は笑いながら金貨に群がります。

それを見て王様は大笑いしながら、城へと戻って行くのでした。

さて、民衆へのパフォーマンスも上手く決まり、王様は上機嫌で自分の椅子に腰かけてにやにやと笑っています。

そこで、王様は何か思いついたように椅子から立ち上がり、大広間に家臣たちを呼び寄せました。

偉い家臣も偉くない家臣もみんな大広間に呼び出されてました。

王様は真面目な顔をして家臣たちの前でこう話します。

「さて、家臣諸君。今、余が着ているのは遙か遠くの国の服だ」

王様は自分の着ているものを家臣たちに見せつける。

と言つても、その王様の格好はほぼ裸同然でそこには服など見えはしなかった。

「世界は広いとは言うが、何とこの服は馬鹿には見えぬ服らしい」
ここで王様の顔がひどくいやらしい笑顔に変わりました。

「さあ、余の賢い家臣たちはもちろん余のこの服が見えているはずだ」

王様が家臣の一人を指差します。

「ならば余が着ている服が一体どんな服なのか教えてほしいのだ、
うん」

つまり、これは王様の気まぐれな余興なのです。

家臣たちがどんな面白い返答をするのか、楽しみで楽しみで仕方がないのです。

王様は家臣の一人一人に指差して服の見え方を聞きます。

家臣たちもこれがいつもの王様の気まぐれだと分かっていますから、月並みな感想からちよつと捻ったようなものまで色々と出てきます。

『すぐく……カッコいい……です』

『豪華です。セロテープの次に……』

『うえつぷ、雨に濡れた野良犬の臭いがします』

それでも王様は面白くなさそうな顔をしています。

刺激に慣れ過ぎて、ちよつとやさつとじゃ感動なんてしないようです。

「いや、皆つまらんな、実に物足りない。お、どうだ、お前はこの服をどう思う？」

家臣にはあらかた聞いてしまいましたので、王様はたまたま目についた給仕役に聞きました。

給仕役はとつさのことで驚きましたが、やがて落ち着いた声でこう答えました。

「王様の服は美しいです。私はこれほど綺麗なものを今まで見たことがありません」

「ほう、それはどんな感じに美しいのだ？」

「金色の糸を織り込んだ生地にダイヤモンドで作られたボタン。袖に散りばめられた赤や青に輝く宝石、五色の羽飾り。どれをとっても最上級の美しさです」

給仕役はまるでその服が見えているかのように話します。

これには王様も感心して、侍従に命じて金銀玉石を給仕役に与えさせました。

「わははは！面白い奴だ。ほれ、この金銀は褒美だ、受け取れ」

「あ、ありがとうございます」

「いやいや、お前ほど演技の上手い奴はなかなかいないぞ。まるで本当に服が見えているようだ」

「演技とは何のことですか？」

給仕役は王様の言葉に首を傾げます。

「ははは！ もう演技をしなくてもいいぞ。これ以上やっても褒美は出んからな」

「失礼ですが、王様は私をからかっておられるのですか。私はただ眼に映る王様の服のことを話したまでです」

そう言つと給仕役は再び王様の服について話を始めました。

今度はもつと詳しく、生地縫い方から宝石の大きさまで詳しく話しました。

王様は気味が悪くなりました。

ありもしない服のことを、まるで目の前にあるかのように話す給仕役はどう見ても気が狂っているようにしか見えません。

「おい、お前は本当にこの服が見えるのか？」

「もちろんでございます」

「ふむ、だが余の眼には服なんて少しも見えないのだが」

「え、そんなはずはございません。服は確かにそこにあります！」

「ほう、お前は余が馬鹿だと言いたいのか？ 『馬鹿には見えぬ服』が見えない余を」

「そ、そんな。め、滅相もございません！」

「うるさい！ おい、こいつを侮辱罪で罰しろ！ 百叩きの刑だ！」

王様は給仕役に対する恐怖と怒りで給仕役を罰しました。

痛々しい鞭の音が城中に響き渡ります。

百叩きが終わった後、給仕役は片目を繰り抜かれました。

「見えないものが見えるような眼は繰り抜いた方がいいだろう」

王様はそう言つて給仕役の眼を繰り抜き、そのまま城外に追い出しました。

傷ついた給仕役はそのままどこか遠くの方に消えて行ったそうで

す。

時は流れ、若さを持てあましていた王様の髭ももうすっかり白くなつてしまいました。

ある日、行商が王様の下にやつて来て一着の服を献上しました。その服は王様も家臣たちも今まで見たことのない美しさで、その服を目の当たりにした人たちはみんな感動のあまり言葉を失いました。

金色の糸を織り込んだ生地ダイヤモンドで作られたボタン。袖に散りばめられた赤や青に輝く宝石、五色の羽飾り。どれをとっても最上級の美しさでした。

しかし、王様はこの服にどこか覚えがありました。

王様は行商に聞きました。

「おい、行商よ。一体この服をどこで手に入れたのだ？」

「はい、王様。これは国の辺境に住むある男が作ったものでして、何でもこの服を作るために何十年もかけて世界中に材料を探しに行つたとか」

「ある男だと？」

「はい、片目の老人です。もつともこの服が完成したころには残つた方の目ももう見えなくなっていたようですが」

その時、王様は思い出しました。

若い頃の自分が恐怖と怒りで城から追い出した給仕役のことを。

「そ、その男は今どこにいるのだ？」

「その、王様。その男はひと月ほど前に死にました」

「何だと」

「その男は死の間際に、この服を王様に渡すようにと行商である私

に頼んだのです。何でも若い頃に見た服の美しさを城の人に伝えられたそうです」

「そ、そうだったのか」

王様はその美しい服を見てじつと黙ってしまいました。

その服は城の宝物庫に大切にしまわれました。

「正しき給仕役」と名付けられたその服は今でも宝物庫の中で輝きを放っているのです。

よく分かる日本語講座(前書き)

> i 2 2 6 8 4 | 1 2 7 0 <

ジャンル：コメディ

よく分かる日本語講座

さあ、やってまいりました「よく分かる日本語講座」の時間です。今日も国語辞典片手に日本の言葉を分かりやすく解説していきますよ。

それではさっそく行きましょうか、レッツ・ニッポンGO！

よく分かる日本語・その一

『物々交換【ぶつぶつ こうかん】』

貨幣を媒介とせず、品物同士を直接交換すること。原始的な交換手段の一つ。

ブツ（銃）とブツ（クスリ）を交換することもこの例に漏れない。

使用例

「ホワイトデーは三十倍返し？ それはちょっと物々交換ってレベルじゃないよね……」

類義語

『ぶつぶつ交換』

互いのニキビやイボなどぶつぶつしたものを交換し合うこと。

こぶとり爺さんの逸話はぶつぶつ交換の一例であり、この交換は古くから行われていたことが伺える。

ちなみに、こぶとり爺さんは小太りの爺さんがダイエットに成功した話ではないことはあまりにも有名である。

『ブツブツ交換』

何やらブツブツ言いながら交換すること。

正直言って、かなり不気味。ブツブツ交換を行っている人たちの横を通り過ぎる時は、あまりの恐さに二度見してから早足で逃げる

のが礼儀である。

何をブツブツ言っているのかは分からないが、おそらく昨今の深夜アニメの批評などをしてしているだろう。

よく分かる日本語・その二

『飴と鞭【あめ と むち】』

そういうプレイの一種。夜のお店に行けば体験できるらしい。

鞭を持っている女の人のことを『女王様』と言い、鞭で打たれる人のことを『M男』という（M男のことを『資本主義の豚』と呼ぶ地域もあるので注意が必要）。

鞭だけではなくギャグボールやロウソクなども使われる。

なにも鞭で打つだけが全てではない。『放置プレイ』や『言葉責め』などがあり非常に奥が深い。

詳しいことは近所のサラリーマンに聞いてみよう。

使用例

「ハア……ハア……女王様、もっと……もっと下さい……ハアハア」

「これがいいのかい？ この豚野郎が！」

「はひい！ き、気持ちいい……です……もっとこの汚らわしい豚に……ご褒美を下さい……」

「豚のくせに生意気な奴だね。あんたにはこれで充分だよ、ペッ！」

「いつ痛い！ こ、これは……飴……」

「あんたみたいな豚には鞭で触れるのも汚らわしいわ！ さあ、飴と鞭、どっちが欲しいんだい、ペッ！」

「い、痛気持ちいい……も、もっと下さい……女王様……」

さあ、もうお別れの時間がやって来たようです。

今日も日本の言葉とディープな文化がよく分かりましたね。
それでは次回の「よく分かる日本語講座」をお楽しみに。

わがびと風車は幾つへ回る(短書体)

> i 2 2 6 8 5 | 1 2 7 0 <

ジャンル：ファンタジー

されど風車は虚しく回る

世の中には実に色々な人がいると言うけれど、私の目の前にいるこの人はそんな中でも変人に分類されるような人だ。

村の外れにあるオンボロ小屋で朝から晩まで窓際の椅子に座って、物憂げな顔で楽器をやったり詩吟をやったりしてる。

この辺りじゃあまり見かけない黒色の髪、それとは反対に色白の肌。すらりと通った鼻、形のよい唇。

黙っていれば恰好良い男の人なのだけけれど、そう、黙っていればね。

「何だ、ビッチ。さつきからブツブツと。口を動かす暇があったらもっと手を動かせ、役立たず」

そう、この変人は口を開けば悪口雑言がついて出てくる。つまりその美麗な容姿や仕草に相反してまるで胸の内に悪魔でも棲んでいるのではないかと思えるぐらいに性格が悪い。

人使いも荒いし、劳いの言葉なんて聞いたことが無い。

そんな性悪男の世話をする、それが今の私のお仕事。だから今、私は彼の肩を揉んだりなんかしている。

「おいビッチ。さつきから心が籠って無いぞ。ビッチは肩揉みも満足に出来ないのか」

「それはすいませんでしたね。それに何ですかさつきから私のことビッチビッチって」

「へっ、女はみんなビッチって決まってるんだよ」

下品低劣卑猥……この男の頭の中はそんなものばかりがぎっしりと詰まってるんだろうな。

「そんなの偏見です。っていつか名前前で呼んで下さいよ」

「ああ？ お前の名前って何だっけ」

「ロツシュです。もう一カ月も経ってつるんだからいい加減覚えて下さいよー！」

あ、申し遅れました。私、ロツシュって言います。
理由^{わけ}あって、ひと月前から住み込みでこの変態男のお手伝いをや
つてます。

主な仕事内容は食事掃除洗濯……など、彼の身の回りの世話なの
ですが、見ての通りこの変態に振り回される毎日です。

村に雇われているって形だからお給料はちゃんと村が払ってくれ
るのです。さすがにこんな変態の下で只働きするもの好きはいませ
んよ。

あとお尻触られたりとかは無いですが、常日頃から下劣卑猥な罵
詈雑言が浴びせられるのでここでの仕事が長続きする人はほとんど
いないそうです。

私の前にいたお手伝いさんはなんでも二週間でやめたそうで……
うん、わかりますよ、そのやめたくなる気持ち。

「ロツシュね、ロツシュ……覚えづらいからビッチでいいだろ？」

「ダ・メ・で・す！」

「ったく、コロコロ変わるビッチの名前覚えたところで意味ねえだ
ろっが」

「何ですって！ 私だってもっといい仕事があればこんなお手伝い
なんてすぐやめてやるわよ」

「へっ、でもやめれないんだろ」

「う、それは……」

そう、最初はこんな仕事で大した稼ぎになるとは思ってた無かった
んだけど、先日、今月分のお給料の額を見てみたら……驚いた。

どうして村はこんなただの変態にこれだけお金を掛けたがるのよ。
確かにあの常日頃の精神攻撃を考慮したらちよつと多く貰わなき
やわりに合わないんだけどさ。それでもこの額は多すぎよ。もしか
したら村会議員級のお給料を貰ってるんじゃないの、私って。

あーもう、これだけ儲かる仕事なんてそうそうないわよ。だから

やめるにやめられないっていう矛盾、心の葛藤。

「おい、ビッチ。お手てがお留守だぞ」

「あ、はいはいすいません」

って、ビッチじゃないって言ってんだろつが。この変態野郎。

そんな感じで怒りを込めながら変態野郎の肩をぐいぐいと揉んでいると、ふと、窓の外の景色に心を奪われた。

立ち並ぶ風車が真っ赤な夕焼け空に包まれ、周りの景色と混ざっていく。そんな光景を私はすごく美しいと感じる。胸のどこかへ何が騒ぐ、そんな感じがする。

「……おい、また手が止まっているぞ」

「あ、すいません。ちょっと外の景色に見とれてて」

「景色？」

「ええ、ここから見える風車が夕日と一緒に混ざっていく瞬間が好きなんですよ、私」

「ふっ、俺にとってはただ耳障りな風車だよ」

そう言って、彼は窓の向こうのどこか遠くを見つめる。正確に言うと、彼は何にも見ていない。いや、何も見えていないのだ。

この稀有な変態がこの若さで私みたいな身の回りの世話をするお手伝いをする理由はこのことに起因する。

彼の目はまったく光を通さないのだ。つまりは盲目。

彼がいつからそうなったのか、そもそもどうしてこんな村外れの小屋にいるのか、村はどうして彼をこれほどまでに手厚く世話するのか、そんなのは一切知らない。

私が知っているのは、キファーノと言う彼の名前くらいなものだ。それ以外は知らないし知ろうとしたことも無い。だって私はご主人様、私はお世話役、それ以上でもそれ以下でもないからだ。

だから彼の弾く楽器や謡う詩吟を上手いとか凄いとか思ってもそれについて「どうして」と尋ねる権利も理由も私には無いのだ。

「肩揉みはもういい。俺はもう寝る」

そう言つて、椅子から立ち上がるつとする彼を私は横から支える。彼は腰元からぶら下げている剣を左手で大事に握りながら、寝室へと足を進める。

彼はその剣をひどく大事にしている。他人に触れさせることは決してない。それについても私が「どうして」と聞くわけにはいかない。

私は彼をベッドの上に寝かせると、部屋の明かりを消してそのまま自分の部屋へと戻って行く。彼の世話、それだけが私のお仕事。

*

どうもロツシユです。今日はあの変態キファーノさんは出かけていません。

朝、村のお偉いさん方がやって来てキファーノさんと何かお話しした後にもそのままどこかへ出かけていったのです。

だから、私は今、この久々に得た束の間の休息を満喫しているのです。

さて、窓際に腰かけてアフタヌーンティーと洒落込みましょう。ラジオをカチャカチャと回して巷で流行りの音楽を聴いて身も心もリフレッシュです。

ふと昼時の睡魔に襲われますが寝てはダメです。キファーノさんがいつ帰つて来るかも分からないのに昼寝なんかしちゃったら、キファーノさんに見つかったとき何を言われるか分かりません。

『何だ、ファツキンビツチ。食つて寝て食つて寝て、そのままぶくぶく肥つて豚になつちまうぞ。ああ、でもお前はもう雌豚ビツチだから関係ねえか、ケケケ』

とか何とか言うに決まっています。だから、何としても寝るわけに

は、ねるわけに……。

「おい、ビッチ。ご主人様が帰って来たつてのにブーブーいびき掻いてんじゃねえよ」

そんな罵声で私は叩き起こされた。あちゃあ、寝てしまったか。

「あ、ごめんなさい……。つてどうしたんですか、その恰好！」

私が驚いたのは無理もない。帰って来たキファーノさんの恰好はどうしたら一日でここまで汚すことができるのかと言うぐらいドロドロに汚れていたのだ。

「何でもねえよ。俺はもう疲れたから寝る」

「そんな、せめてお風呂に入ってからにして下さいよ」

「ビッチのくせにうるせえな。俺が寝てる間にお前が拭きゃあ良いだろうが。ビッチは得意だろ、そういうの。あと、服が土とかで気持ち悪いから綺麗に洗っとけよ」

彼はそう言うと、私の肩に負ぶさった。私はその泥臭さに息を堪えながら彼を寝室に運び、服を脱がせてベッドに寝かせた。

洗面器にぬるま湯を張って持って来た時にはもう大きないびきをかいていて、私が濡らしたタオルで体をごしごしと拭くのもお構いなしにひたすら眠り続けたのだった。

ドブネズミのように汚れた服はよく見てみると血の塊みたいなのがこびり付いていたけど、何かの間違ったと思うことにした。何かの事件に巻き込まれたらたまったものじゃない。

夕焼け空が全てを赤く染め上げようとしている中、私は洗濯板にごしごしと汚れた服を擦りつけているのだった。

*

こんにちは、ロツシュです。今日は市場に買い物に来ています。夕食の材料を買いに来たはずなんですけど、気が付いたらもう日がどっぷりと沈んじゃってます。はわわ、これじゃ完全にキフアーノさんに怒られる。

『飯も作らずご主人様をほったらかすなんて、最近のビツチは良い御身分だな。どうせブヒブヒ言いながら拾い食いでもしてたんだから、でも、こんなに遅くなるまで出かける羽目になったのはキフアーノさんにも原因があるんですよ。』

『おい、ビツチ。市場に行くなら俺が今から言うもの買って来い』なんて言うから、彼の言うものをカリカリと紙に書いて市場に出かけたのだけど、全然見つからないわ量が多いわで市場中を駆けまわってたらもうこんな時間になってしまったのだ。こんなお使用のせいで裏市の怪しげなお店とかにまで足を運んじやったじゃないのよ。どうせこのまま帰っても『なんだ、お使用も満足に出来ないのか、この腐れビツチ』とか何とか言うんでしょ、あの鬼畜主人は。

ああ、でも言われたものもようやく揃ったしとりあえずは戻れるわ。

「あ、ここからだとなんか風車がこんなに近くに見えるんだ」
市場のすぐそばに風車が立っているから、あんな村外れの小屋から眺めるのよりもずっと大きい。

日暮れに見る風車は真つ黒な姿でそびえ立っていて、まるで大きな生き物のようにも見えた。

「んー、やっぱり夕焼け空じゃないとダメよね。何だかちょっと不気味な感じもするし」

目線を風車から薄暗い足下に戻して、私は荷物の重みをひしと感じながら市場を後にした。

「にしても暗くなっちゃったな。ランタンか何かあればよかったかな。夜道って何だか怖いし」

そんな独り言を呟きながら歩いていると、突然ズシンと大きな音

が背後から聞こえてきて、市場の方が急に明るくなった。

「な、何があつたの……って、嘘」

私が振り返ると市場から真っ赤な火の手が上がっていた。そして風車があつたところには咆哮を上げる巨大な生き物がそびえ立っていたのだった。

続いて人々の悲鳴が上がって、その悲鳴は音の渦となつてこつちに押し寄せてきた。

「ちよ、ちよっと待つてよ」

そう、押し寄せてきた音の波は市場から逃げてきた人々だったのだ。

ちよ、ちよっと私にはこの状況が何なのかさっぱりよ。何か大きな音がしたと思ったら、市場は燃えてるし大きなのはいるし、私はいったいどうすればいいのさ。

突然の出来事に混乱しながら、咄嗟に私は逃げ惑う村人の一人を捕まえる。

「ちよ、ちよっと、何があつたんですか。それにあの大きなのは一体」

「俺も分かんねえよ。急にあのデカイ竜みたいなのが飛んできて市場の一角を踏みつぶしちまつたんだよ。そんでどつかから火の手が上がって……ああ、もうあんたも早く逃げろよ！」

村人はそう言うのと私の手を払いのけて再び市場とは逆の方向に走り出した。

そ、そうね、私も逃げなくちゃね。背に腹は変えられないからこんな重い荷物はそこに置いてといて、と。よし、逃げよう。

私は思いつき走り出した。そしたら……。

「ぶぶっ！」

そう、走り出したとたん誰かにぶつかって、そのままひっくり返ってしまったのだった。

「誰ですか。こんなところで立ち止まらないで下さいよ」

「そりゃあ、悪かつたな。ファッキンビッチ」

その声には聞き覚えがあった。というか人に向かってファツキンビツチなんて言うのはあの人以外にいない。

「キファーノさん！ 何でここに……」

「ああ？ ファツキン召使いがいつまで経っても帰って来ないからわざわざ迎えに来てやったんだろ、ビツチ」

何よ、ファツキン召使いって。あんたが変なもん買いに行かせるから遅れちゃったんじゃない。

「というか、よく一人でここまで来れましたね」

「ふっ、舐めるなよ、ビツチ。たとえ目が見えなくても鼻と耳があれば一人でも出歩けるさ」

そうだったのか。何気に凄いなこの人は。あれ、それじゃ……。

「それじゃあ、いつも私がベッドまで運んでたりしたのは何か意味があつたんですか!？」

「あれは俺が楽をするために必要なことだ。召使はご主人様が楽をするためなら何でもするもんだろ?」

何よ、こいつ。じゃあ、今まで私が担いだり支えたりしてあげたのは全部自分が楽をするためだったのね。ああ、ムツカつく。

「そんなことより何だ、この騒ぎは。五月蠅くて寝れやしねえ」

「あ、そうそう。市場に竜が出たんですよ。それにどこから出た火で市場も燃えちゃって」

「は？ 竜だと。ビツチ、お前ももつとましな嘘をつけよ」

「え、嘘じゃないですつて。本当にあそこに竜が……」

「いくら腐れビツチでも、盲目をからかうのは感心せんな。どうせ風車が火事にもなってるんだろ」

そう言つとキファーノさんは竜の方に向かって歩き始めた。

「ちよ、ちよつと待って下さいよ！ 危ないですから逃げましょうつて」

私はキファーノさんを引つ張つて必死に止めようとするけど、彼はそんなこと関係なしにズンズン進んで行く。私はそのままズルズ

ルと引き摺られる。一体この細い体のどこにそんな力があるのよ。
逃げ惑う人たちとは真逆の方向に向かって彼と私はスタスタと歩いて行く。

気が付けば、もう竜とは目と鼻の先という距離まで来ていた。
燃える市場の火は空を紅く染め上げ、その空の真下では悪の化身のように凶暴な竜がどんとそびえ立っている。

「ちょ、今ならまだ間に合いますから引き返しましょうよ」
私が涙目になって懇願するけど、目の前のこいつは聞く耳持たずだ。

「ね、逃げましようよ。命を粗末にするのはダメですよ、ね？」

「うるさい女だな。それにいい加減離れろ、ビッチ」

男の無謀を止めるべく必死にしがみついていたか弱い私を、あるうことかこの男は振り払ってドンと突き放したのだ。本当に最低な男。

「いいか、お前らクソどもは恐怖で目の前が見えなくなってるんだよ。そんなチキンどもに俺が現実を見せてやるよ」

そう言つと、彼はいつも大事そうに腰からぶら下げている剣を鞘から引き抜いた。

「ビッチ、お前はそこで指でもしゃぶって大人しくご主人様の雄姿を眺めてるんだな」

彼はそのまま竜に近付いて行った。

ああ、もう分かったわよ。もう止めないわよ、勝手にやればいいじゃない。いいわよ、あんたが言うようにじっくり見てりやいいんでしょ。

私は近くの安全そうな物陰まで移動して、彼の様子を眺めることにした。

さも勇敢に竜に立ち向かう彼だが、その剣はどう見ても切れそうには見えない。

いくら夜と言えども刃先は輝く素振りすら見せない。むしろ、真っ黒に濁った感じ。よく見るとあれは血で汚れているのか、だから黒く濁って見えるんだろうな。

血。ふと、私はこの前、彼がドロドロに汚れて帰って来た時のことを思い出した。もしかして彼は私の知らないところでかなり血生臭いことに巻き込まれているんじゃないだろうか。

と、そんなことを考えていると彼はもう竜のすぐ目の前にいた。そして切れそうにない剣をゆっくりと振り上げて、そのまま竜の足に突き刺そうとした。

そんな無茶な。竜はいかにも硬そうな鱗で覆われてるんだから、そんなどうやっても切れないような剣じゃ剣の方が負けてポツキリいっちゃうよ。

でも、私のそんな心配は無用なものだったことがすぐに分かる。

「ど、どうして」

剣は黒光りする鱗と鱗の間に入り込んで、ずぶりずぶりと深く深く竜の身に突き刺さっていたのだった。

竜は悲鳴のような咆哮を上げたけれども、彼はそんなこと気にも留めずニタリと笑ってそのまま剣を引き抜いた。傷口からは真っ赤な血がドロドロと流れ出す。

すかさず彼は竜の体をよじ登る。足の痛みのできつきから竜は暴れ回っているようだけど、彼はすいすいと駆け上がって行く。

落ちそうになったら剣を竜の体に突き立てて、体勢を整える。そしてまた登って行く。

そんなことが何度も繰り返されるものだから竜の痛みは尋常ではないようで、叫びも暴れ具合もますますヒートアップしていた。

激しい痛みにも首を振り、あちこちの木々や岩にぶつけ、空と大地が割れそうなくらいの声で叫び続ける。もう、その様子は何だか人間の私が同情するくらい痛々しい。

も、もしかして、彼はわざとやってるんじゃないだろうか。彼はもう結構高いところまで登っているからその表情はわからないけど、

たぶんニタリと下品な笑顔を放っているんだろう。
まさに鬼畜だ。というか何者なんだろうか彼は。

さあ、彼はもう竜の頭頂部まで登って来ていた。これから彼が何を
するのかは分からないけど、おそらくとんでも無いことが起きる
んじゃないだろうかと私は踏んでいる。

竜と対等にやり合う常人離れの彼だけど、あれだけ剣を突き刺し
てもまだ生きているこの生物のタフネスさにも驚嘆の声を禁じえな
い。

だから流石の彼でもこの竜の息の根を止めるのには一筋縄ではい
かないんじゃないだろうか。それに……。

竜はさつきからまるで頭の上にいるゴミを振り落とすようにギユ
ンギユンと首を振り回している。彼は振り落とされまいと竜の鬚たてがみな
んかを掴んでいる。

つまりは足場が極端に悪いわけだ。

確かにいつまでも足元ばかり攻撃しても決定打にはならないだろ
うけど、どンドン上に登ったところで振り落とされるかもしれない
んだから結局無駄だったんじゃないかな。

でも、私のそんな考えなんて無視するように彼は竜の眉間の辺り
に剣をずぶりと突き刺した。

すると竜は大地を震わす断末魔のような咆哮を最後にぴたりと動
きを止めた。

「え、そんなあっさり……って」

息絶えた竜の大きな屍はそのまま崩れ去るようになり倒れ始めた、
私の方に。やばい、逃げなきゃ潰される。

私は必死に逃げた。倒れ来る巨大な亡骸から必死に逃げた。高鳴
る鼓動、背中を流れる嫌な汗、悲鳴を上げる前身の筋肉、それでも
私は走った。

ズシンと地響きのような音を上げて、屍は地面に崩れ落ちた。

その巨大な屍と私との距離、有に1メートル。危なかった、けど無事に生還できた。

「やった、助かった……ケホツケホ……って、何よこの土煙、ゲホツゲホ」

私は竜の死骸が捲き上げた土煙のせいで盛大に咳き込んでしまった。ああ、目に砂が入って痛い。ちよつと早くこの土煙の中から出なきゃ。

「おい、ビッチ。ご主人様を置いて逃げるとはいい度胸だな」
「へ？」

舞い上がる土煙の中から現れたのは、血でドロドロに汚れたキフアーノさんだった。

てつきりさっきの衝撃に巻き込まれて死んじゃったのかと思ったけど、生きてたんだこの人。

ま、とにかく私は彼の手を引つ張って土煙の中から何とか脱出した。

「はあああ、やっと出れた」

「ったく。お前、俺が出てこなかったら本当に一人で逃げるつもりだったろ」

「いえ、そんなことはないですよ。後でちゃんと亡骸を探そうとか思ってた……あ、しまった」

「……クソビッチが。まあいい、疲れたから負ふれ」
「はいはい、わかりましたよ」

そう言っただけで私は彼を背負って、村外れの小屋へと足を進めた。市場の火事はもう静まってるみたいだし竜の死骸も他の人が何とかしてくれるでしょ。

だから私は後ろを振り向かずには歩き続けた。本当のことを言うと、背中がもの凄く機嫌が悪そうだったから怖くて振り向けなかっただけだったんだけど。

「あの、一ついいですか？」

「……何だ、腐れビッチ」

「さっきの竜って最後あっさり倒れましたよね。最初は何度刺しても倒れなかったのに」

「ふん、あれか。いいか、どんなに図体がデカい奴もタフネスな奴も頭をやられたらお終いだ。だからあのウスノ口の頭蓋骨がち割って、足りねえ脳味噌ぐちゃちゃにしてやっただけだ」

「脳味噌ぐちゃぐちゃって、うええ。何か気持ち悪くなってきた」
「お前は脳味噌空っぽだからそんなの関係ねえけどな」

う、相変わらずこいつは口が悪い。ああ、もうここに置いてつてやろうかな。

それにしても、目が見えてないのにあの素早い身のこなしや剣の使い方は只者じゃないよね。まるで結構手慣れたるみたいだったし。
「あの、もしかしてこの前、ズタボロに汚れて帰ってきたときも今日みたいなのがあったんですか」

「質問は一つしか許可してないぞ、ビッチ」

ふんだ、何だよケチ。ちよつとぐらい教えてくれてもいいじゃん。すると後ろから淀んだようなため息が聞こえてくる。ああ、ため息が首筋に当たって気持ちが悪い。

「お前らは目が見えてるせいで真実が見えてないんだよ」
「え？」

「なまじ目が見えるから敵を大きく見過ぎる。目で見た恐怖とかそんなが敵をぶくぶくと大きく膨らませちまう」

「で、でも、あんなのが出てきたら怖いに決まってるじゃないですか」

「だが、現実はそのような大したことは無かったらうが」

「それはそうですね」
「自分が創った恐怖像に怯えて、腰が引ける。それで手も出せやしないとなったら、それこそお笑い草だ」

気が付けば、彼は私の背中の上で寝息を立て始めていた。まるでさっきまでの邪気に満ちた発言とは裏腹の安らかな寝顔だった。

「偉そうなことを言う割に、寝顔は無垢な子供みたいなんだよな」

私は村外れの小屋へと続く長い坂路をゆっくりと登っていた。

*

あの事件があつてから一週間、村は何の変化もありません。

市場はすぐに復興したし、竜の死骸は適当に片づけられてもう噂にすら上つてこない。

「何だか面白くないですよね」

「別にいいじゃねえか、誰が覚えてようが忘れようが。平和が一番だろ」

「平和が一番つて、キファーノさんに一番似合わないことばですよね」

「何だと、ビッチ。そもそも馬鹿どもは真実を見ようとすらしてねえんだろ。自分に都合のいい虚像の方がずいぶんと楽なもんだからな」

「でも私はあんな怖い体験忘れられそうにないですけどね」

「じゃあお前が覚えてりやそれでいいんじゃないかねえの」

「そういうことじゃないんですよ」

「ま、どうでもいいが、また怖い体験を味わいたくなかつたらこんなところでぶー垂れてないでさっさと働け、クソビッチ」

そう言つてこの腐れ下衆野郎は腰の剣に手をかける。わ、わかつたわよ、しゃきしゃき働きやいいんですよ。

私は逃げるようにして洗濯物を外に干しに行った。

「でも本当にすべてが幻だったみたいだね」

晴天の下、世界はいつも通りに回っている。

私はふと遠くの方を見た。するとそこには風車がゆっくりクルクルと回っていた。

あの風車も私と同じです。すごい近くでアレを見てたはずなのに、いつも通りに回っている。まるで何も無かったかのように。

これから彼と一緒にいれば同じように事件に巻き込まれて、それでも世界は何事も無かったように回るんだろうか。

まあ、でもそれもいいのか。

ご主人様とお世話係の関係がずっと続いて前みたいな事件に巻き込まれて、それでも同じように毎日が回る。

そんな毎日。真実も虚像も入り混じった、風車のように変わらずクルクルと回る毎日を私たちは生きている。

(了)

盗作（前書き）

> i 2 2 6 8 6
— 1 2 7 0
<

ジャンル：文学

盗作

雑誌の編集業をしている私はある日、とある小説家の原稿を受け取るためにその先生の仕事場を訪れていた。

「ちょうど今、原稿が出来たところだよ」

そう言って原稿を差し出してくれたのは作家のK先生で、うちの雑誌に毎月エッセイを書いてもらっている。先生は十年程前にヒット作を生み出したいわゆる有名作家であり、うちの看板作家でもある。

「そう言えば、君んこの雑誌で今度F君が書くそうじゃないか」

Fとは今売出し中の大人気作家で、昨年出した小説が大ヒット以来、書く話全てがスマッシュヒットを飛ばしている。もうすでに文学賞の話まで出ているほどだ。

「ええ。F先生には再来月号の読み切りをお願いしてるところです」「ふうむ。僕はこんなことは言いたくないんだがね、F君に原稿を頼むのは止めたほうがいいんじゃないかな」

突然K先生はそんなことを言い出した。一体どういうことだろう。これはいわゆる新人潰しというやつなのだろうか。

「ええっと、それはどうしてですか」

「どうしてもこうしても、F君は作家として絶対にしてはならないことをしてしまっただよ」

「絶対にしてはならないこと？」

「盗作だよ」

苛立ちのこもったような声でK先生は答えた。

F先生が盗作？ そんなことは初耳だ。

それに私はF先生に何度か会ったことがあるが、本当に真面目な人でとても盗作をするなんて思えない。

「そんな、何かの間違いじゃないでしょうか。F先生が盗作するなんて信じられませんよ」

「ああ、僕も信じられなかったよ。僕とF君とはデビュー前からの付き合いだけどね、彼はそんなことをするような人間にはとても見えなないよ」

K先生は残念そうな物言いですう言つて席を立つた。するとどこから原稿用紙の束を持って来てドサツといと私の前に置いた。

「これは僕がずいぶん前に書いたものだよ」

その原稿用紙は本当にずいぶん昔のもののように紙は痛み、あちこちが黄ばんでいた。

そしてK先生はそのまま続ける。

「F君が去年出した小説を知っているかい」

「『道化師の理屈』ですか？」

「そう、その『道化師の理屈』だ。あれでF君は一気に有名作家となったわけだが」

「でもまさか『道化師の理屈』が盗作だなんて」

「そのまさかなんだよ。『道化師の理屈』は僕が昔書いた小説とまるつきり内容が同じなんだよ」

K先生は静かに語気を荒げて、さつき私の前に置いた原稿を指差した。

「この小説は随分昔に書いたものだが、結局どこにも発表せずに机の奥にしまっていたんだ。僕はこれをF君に見せたことがあったんだけど、まさかこんなことになるとは思わなかったよ」

そう言つてK先生は深いため息をついた。

「で、でもF先生が本当に盗作したとは限らないじゃないですか。題材が被るのはよくあることですし」

「登場人物の設定、話の展開、結末全てが同じなんだよ。それに内容も他に類を見ないほどの斬新さだ」

確かに私は今まで『道化師の理屈』と同じような作品は見たことがない。

個性的な登場人物、特異な世界観、そして今までに無いような話の展開と読者を欺き続けた驚愕の結末。

そんな斬新さと特異さの重なりが大ヒットを生み、F先生を一躍有名作家にまで押し上げたのだ。

あれと同じ内容の小説が偶然二つ存在することになるだなんて普通は起こり得ないことだろう。

「まあ、これを読めば僕の言ってることが本当だってすぐわかるよ。そう言っつてK先生は原稿の束を私に手渡した。

心臓が鼓動を速めていくのを感じながら、私は原稿用紙をペラペラと捲って読み始めた。

私は半分ほど読んだところで気が付いた。これは面白くない、と。登場人物の設定、話の展開、結末まで全てあのヒット小説『道化師の理屈』と同じなのに、悲惨と言えるほどつまらない。

確かにこれ単体で見ればその内容の特異さから面白いと感じられるかもしれないが、『道化師の理屈』と比べてしまうと明らかに見劣りしてしまう。

文章も場面の見せ方も『道化師の理屈』と比べれば粗雑で、せつかくの斬新さも文章構成や見せ方のせいで台無しになっている。

F先生の作品の完成度が高すぎるが故にこのK先生の小説は非常につまらないものになってしまっているのだ。

「あの、先生は『道化師の理屈』をお読みになったことは……」

「ないよ。世間があまりに絶賛してるから風評なんかで内容やあらすじを知っただけだ」

K先生はあっさりとなんか言うので、私は鞆の中からたまに友人に貸すつもりだった『道化師の理屈』を取り出してK先生の前に差し出した。

「とりあえず読んで下さい。私の言いたいことが分かると思います」
K先生は渋々といった様子でページを開いて読み始めた。

一時間ほど経ったところで読み終わったようで、先生は本をパタ

りと閉じた。どうもその顔には苦笑いが浮かんでいる。

「いや、どうやら僕の勘違いだったようだ。よく考えたらF君が盗作なんてするわけないな、あはは」

先生はわざとらしい笑い声を上げながら、先程の原稿の束をくしゃくしゃに丸めてそのままゴミ箱に投げ入れた。

私は先生と同じように作り笑いを浮かべて仕事場を後にした。

F先生が盗作をしたのは事実だ。だから仮にK先生がF先生のことを批判しても誰も文句は言わないだろう。

だけどK先生の作品がF先生の盗作よりもつまらないということが世間に知られてしまえば、K先生の面目は丸潰れになるに違いない。

だから今日のこの話はK先生と私の胸の奥深くにしまって置くことにしよう。

大発見(前書き)

> i22695 — 1270 <
ジャンル：シュールコメディー

大発見

いかにもつまらなそうな化学の教科書をパラパラとめくってみる。高校生用のものなのでそんな専門的なことは書いていないが、目にとまった二つの黒い太字があった。

目にとまったのも何となくカッコよさそうというだけだが、その太字の説明には大体こんなことが書いてあった。

ファンデルワールス力：二つの物体が近づけば近づくほどますます互いに引きつけ合う力

クーロン力：静電氣的なプラスとマイナスが引きつけ合う力

なるほど私はすごい大発見をしてしまった。

真冬の布団から出られない理由を、だ。

怪談「スマイル」(前書き)

> i 2 2 6 9 6 | 1 2 7 0 <

ジャンル：ホラー・コメディ

怪談「スマイル」

ある寒い日、男はポケットの小銭をジャラジャラさせながら街を歩いていた。その日は身も凍る程の寒さで空は一面暗灰色の雲が広がっていて、今にも何か降ってきそうな感じだった。

すると、ついに降り出した。まるで空から矢でも撃っているのではないかと思えるほどの激しい氷雨が男を襲った。

こんな冷たい雨に濡らされてはたまったもんじゃないと思い、男は雨が降りだすと同時に近くにあったハンバーガーショップに飛び込んだ。

こうして男は運良くびしょ濡れを免れたわけだが、先程からどうも妙な違和感を覚えていた。男は店内をぐるっと見回す。するとその妙な違和感の正体はすぐに理解出来た。

このハンバーガーショップは初めて入る店ではあるが、客はまるで閑散としている。そして店内は嘘のように静まりかえっていた。ぞっとする光景だ。

しかし、レジの方に目をやった男はさらに背筋の凍るような衝撃を感じた。

男が見たのはハンバーガーショップの店員だ。いや、店員がいるのは何もおかしいことではない。おかしいのはその店員の容貌だ。目元が隠れる程の長い髪、生気の見られない白い肌、薄紫の唇。そして客商売には相応しくない無表情。

そんな女性店員がレジの奥で不気味な雰囲気醸し出していた。もしかしたら踏み入れてはいけない領域に足を踏み入ってしまったのか。男の足は得体の知れない恐怖からか無意識のうちに後ずさっていた。

しかし、外は氷雨の大豪雨。このまま外に飛び出すのはあまりに無謀すぎる。だったらやることは一つしかない。男は恐る恐る足を

レジへと向けた。

そして不気味な無表情の店員に向かってこう言った。

「スマイルを

> i22700—1270<個下さい」

男の注文により店内は言い様もないほどの静けさに包まれた。

無論男も沈黙していた。いや、言葉が出なかったというよりは今の状況を全く把握できていなかった。

男は何を血迷ってあのような意味の分からぬことを口走ってしまったのだろうか。

おそらく男も相当のパニックに陥っていたに違いない。脳内の整理が出来ぬまま注文をした結果がこのざまだ。痛い、沈黙が痛い。最悪な状況で最悪な選択肢を導き出してしまった自分を呪いながら、男は目線も定まらず気まずい沈黙の中でただただ口を閉じるしかない。

しかし、その沈黙もすぐに破られることとなった。

「スマイルをお二つですね。一緒にポテトはいかがですか？」

さつきまで一言も喋らなかつた店員は男の発した数式をものもの数秒で解き、さらには付け合わせのポテトまで勧めてきた。

男は声を失った。店員の計算の速さに驚いたのではない。店員の笑顔に心を奪われたのだ。

目を隠す長い髪がさらりとなびいてその睫毛の長い大きな目を現す。雪のように白い肌と口元からのぞく綺麗な白い歯。きらりと輝きを放つその笑顔に世の男は魅了される。

その店員は計算の速さと妖艶さから「妖怪」と讃えられるという。

この後、男がポテトとも一緒に注文し、さらには店員に求婚したのだがそれはまた別の話。

実に恐ろしき世であることだ。

社会の時間〜いつかいめ〜(前書き)

> i 2 2 6 9 7 | 1 2 7 0 <

ジャンル：風刺

社会の時間〜いつかいめ〜

さあ、みんなー！ 社会の時間の始まりだよー！

社会先生と一緒に楽しく社会を勉強しようね！

今日のテーマは「国会」だよ！ 「国会」って何なんだろう？

「せんせー、社会先生ー！」

「どうしたんだい？」

「質問なんだけど『国会』って一体何のことなの？」

「ははは、『国会』っていうのはね、人の話を聞かない人たちが話し合うところだよ」

「へー、そうなんだー。ありがとう、先生！」

どうかな？ みんなこれで「国会」についてはバッチリだね！

今日から道行く政治家に国会のことを聞かれても安心して答えられるよ、エッヘン。

ありがとう、社会先生！

あー、もうこんな時間！

今日はここでお別れだよ！ 明日の社会の時間もよろしくねー！

社会の時間くにかいめく(前書き)

> i 2 2 6 9 8 | 1 2 7 0 <

ジャンル：風刺

社会の時間〜にかいめ〜

さあ、みんなー！ 社会の時間がはっじまるよー！

今日も社会先生と一緒に楽しく社会を勉強しようね！

今日のテーマは「議院内閣制」だよ！ 「議院内閣制」って何な
んだろう？

「せんせー、社会先生ー！」

「どうしたんだい？」

「質問なんだけど『議院内閣制』って一体何のことなの？」

「ははは、『議院内閣制』っていうのはね、誰が総理大臣になっても結局はみんなすぐに辞めちゃう仕組みのことだよ」

「へー、そうなんだー。ありがとう、先生！」

「どうかな？ みんなこれで「議院内閣制」についてはバッチリだね！」

「これで見知らぬ野党議員に会っても議院内閣制について自信を持って答えられるよ、エヘヘ。」

「ありがとう、社会先生！」

「あー、もうこんな時間！」

「今日はここでお別れだよ！ 明日の社会の時間もよろしくねー！」

社会の時間くさんかいめく(前書き)

> i 2 2 6 9 9 | 1 2 7 0 <

ジャンル：風刺

社会の時間くさんかいめく

さあ、みんなー！ お待ちかねの社会の時間だよー！

今日も社会先生と一緒に楽しく社会を勉強しようね！

今日のテーマは「三権分立」だよ！ 「三権分立」って何なんだろう？

「せんせー、社会先生ー！」

「どうしたんだい？」

「質問なんだけど『三権分立』って一体何のことなの？」

「ははは、この国にはそんなもの存在しないから気にしないでいいんだよ」

「へー、そうなんだー。ありがとう、先生！」

どうかな？ みんなこれで「三権分立」についてはバッチリだね！

これで思いがけずにモンテスキューに出くわしても怖いもの無しだね、ヤッホー。

ありがとう、社会先生！

あー、もうこんな時間！

実は社会の時間は今日で最後なんだ。

みんなとお別れするのは淋しいけど、みんなのことは忘れないよー！

みんなも社会先生のことを忘れないでねー！ バイバーイ！

変身(前書き)

> i22717 — 1270 <

ジャンル：シュールコメディ

変身

グレゴール・ザムザは目を覚ますと虫になっていた。

わけがわからないのでザムザはとりあえず行きつけの泌尿器科へ向かった。

「ふうん、大変だね」

医者はさもどうでもいいといった風でザムザを診断した。
ザムザは少し焦った。

「先生、もうちょっと驚くとか不思議がるとかあるんじゃないですか？」

「いや、そんなこと言われてもねえ。まあ、お薬出しますから」

医者はそう言って机の上にドンとこけしを置いた。

「何ですか、このこけしは？」

「薬だよ。もつとも昨日までの話だがね。目が覚めると座薬はこけしになっていたってね」

「こけしになっていたって言われても……」

「君だって同じようなもんじゃないか。わかったら馬鹿高い診察費でも払ってさっさと帰りなさい」

医者が気怠そうにそう言うのでザムザは馬鹿高い診察費を払い、こけしを袋に詰めて泌尿器科を後にした。

ザムザが家に帰ろうとしていると、もしもと言って誰かに呼び止められた。警察である。

「何でしょうか」

「いえ、ちよつと職務質問を」

「グレゴール・ザムザです。ちくわの穴に角切りゴボウを詰める工場で働いています」

「外国人か。ちよつとビザを拝見」

「あ、ビザは家に忘れてきたんです」

「何だと。もしかしたら不法滞在者じゃないのか。それに何だ、その手に持っているこけしは」

「これはこけしじゃなくて薬です」

「そんな言い訳が通用するか。どうせ中に麻薬でも隠しているんだろっ！ ちよつと署まで来てもらおうか！」

警官に腕を捕まれパトカーに押し込まれそうになったので、ザムザは必死に暴れて逃げ出した。

虫になっているのだから羽で飛べればいいのだが、生憎ザムザは

羽虫では無いので関節をギシギシ鳴らして走るしかない。

ヒイヒイ言いながらザムザは警察を巻いて、自宅に無事帰還した。

「全く今日は災難だった」

ザムザは溜息を吐いて何かを悟ったように語る。

「そしてなにより一番の災難は、自分が虫になったことが一番の災難じゃなかったことだ」

グレゴール・ザムザはそう言い、夜空に向かって処方されたけしを投げ飛ばした。

明日からは巾着の口をかんぴょうで縛る仕事が始まる。頑張らなくてはい。

ザムザは布団の中に入って目を閉じた。

次の日、グレゴール・ザムザが目を覚ますとザムザはボールペンのキャップになっていた。

ザムザは気にせずそのまま職場に向かった。

北風と太陽（前書き）

> i 2 2 7 1 8 — 1 2 7 0 <

ジャンル：コメディ

北風と太陽

北風と太陽、と言う話をご存じだろうか。

平和な時代。

平和と言うのは実に喜ばしいことだがそれが続いてしまえば倦怠感を感じてしまうというのもまた事実。

それは退屈なある日、北風は太陽にとある話を持ちかけた。

「太陽よお、暇だからさ今からちよつとしたゲームでもしようぜ」
「……は？」

普段は温厚な太陽に気軽な気持ちで話しかけたのだが、まるで太陽は汚物でも見るような目を北風に向けたのだった。

「え、ちよ……な、あんだよその目は……」
「はあ……あのさ、北風。アンタさ、私が誰だか分かってんの？」
「え、太陽は太陽だろ？」

はあ、と太陽はまた溜息を吐いて、気だるそうに小さく「バカが」と呟いた。

「私は太陽。いい、太陽って言うのは太古の昔から多くの人間たちに崇め奉られてきたわけ。人間たちの神話の中では常にセレブ級の扱いを受けて来たわ。植物がすくすくと育つのも世界が明るいのも全て私のおかげなのよ。それにこの太陽系では私を中心に全てが回っているの。だから私は皆が一目置く絶対不可侵な超越的存在と言っても過言ではないわけ。そこんとこドゥーユーアンダスタン？」
「い、いえす。ええと、つまり……？」

「アンタみたいなゲロカス野郎が私に話しかけるなんて100億光年早いつてわけ。わかった？ ゲロカス野郎」

太陽は今まで見せたことも無いくらいの満面の笑顔で北風に「ゲロカス野郎」と言った（大事なことなので二回言いました）。

「ちょ、ちょっと待てよ。俺だって、ほら『風神』とかいつて人間たちから崇められてた時期もあったじゃん？ だから俺と太陽は同格って言っても別に構わないっしょ？」

同格。その言葉を聞いた太陽からブチッと何かが切れる音がした。

「じゃあ、『北風』って一体何なのよ？」

「え、それはえーっと……」

「ほら、自分でもわかんないんじゃない。大気の流れ？ 木が揺れてる？ 波が起こってる？ 雲が流れてる？ でも、アンタは木でも波でも雲でもないじゃない」

「う、そ、それは……」

「ふん、所詮アンタは実体をもたない曖昧な存在なのよ。そんなアンタが気軽に話し掛けれるほど私は安い存在じゃないの。それじゃあね」

自分の存在について頭を悩ます北風をよそに太陽はどこかへ行こうとする。

「あ、ちょっと待て！」

「何よ、まだ何かあるの？ アンタは吹流しのビラビラでもずっとビラビラさせてればいいのよ」

「ここまで言われて黙ってる俺じゃないぜ！」

何を思ったか北風はいきなり……土下座をした。

「……何のつもりかしら？」

「お願いです！ 俺とゲームをして下さい！」

「いやよ」

「そこをなんとか！ この惨めな北風めにご慈悲を！ 太陽……様
！」

北風のあまりにしつこい懇願に流石の太陽も嫌気がさしてきた。

このゲロカス野郎はそこまでして私に構ってほしいのかしら。

「……いいわ。そこまで言うならアンタのゲームに付き合っ
てやる
うじゃない」

「マジでございますか。いやっふうふう！ あ、言い忘れてた
けど、このゲームに負けたら勝った方の言うことを何でも聞
くって
い
う
ル
ル
ル
だからそこんところよく」

「ちょ、ちょっと聞いて無いわよ！」

「言い忘れてたんだから聞いて無いのは当たり前じゃな
ー
い
ん
で
す
か
ー
？ あーあ、流石の太陽さまもついに頭がどうか
な
っ
ち
ゃ
た
ん
で
す
か
ね
ー」

「何ですって！ せつかく私が情けを掛けてやったのに！
いいわ、
誰がゲームなんかやるもんですか！」

太陽はぷりぷり怒りながら再びどこかへ行こうとする。

「あー、いーいんですかー？ “あの” 高貴で皆から尊敬されて
る
太
陽
さ
ま
が
“
ゲ
ロ
カ
ス
野
郎
”
ご
と
き
が
挑
ん
で
き
た
勝
負
を
投
げ
出
す
な
ん
て。
こ
ー
ん
な
こ
と
皆
が
知
っ
た
ら
と
ん
だ
笑
い
者
で
す
ね
ー、
ぷ
ぷ
ぷ
」
「
く
っ、
こ
い
つ
め。
あ
あ、
わ
か
っ
た
わ
よ
！
や
れ
ば
い
い
ん
で
し
よ、
や
れ
ば
ー
！」

「うひひ、始めから素直に従ってりゃいいんで……ブヘツ!!」

太陽の黄金の左がすれ違いざまに北風の顔面にクリティカルヒットした。

北風はそのまま数十メートルほど吹っ飛んだ。

「い、いひなり、なにすんら!!」

「あら、ごめん遊ばせえ。影があまりに薄いから気が付かなくて“ちよっと”ぶつかってしまったわ」

「こ、このお……」

たらたらと鼻血を流す北風は顔だけじゃなくて心も傷つけられたから擦ったくらいじゃ治らないぜ!

「どうでもいいけど、さつさとゲームのルールを説明しなさいよ」「……いいだろうルールはこうだ! ちよと都合良くあそこを歩いてる男のコートを脱がせた方が勝ちだ!」

そう言つと鼻の穴にティッシュを詰めた北風は自分たちの真下を歩いてきた男を指差した。

50代くらいの髪型に明らかに違和感のある男がロングコートを羽織って人通りの少ない道を一人歩いていた。

「あの幸薄そうなオッサンのコートを脱がせばいいのね。気分は乗らないけど、まあいいわ」

「ルールはわかったな! それじゃあ……って、何してんの?」

北風の目に映ったのはクラウチングスタートの体勢で今にも走り出しそうな太陽だった。

「え？ だからあのオッサンのコートを脱がせるんでしょ。」

「いや、そうだけど。まさか直接脱がしに掛ろうとか言っくんじゃ…」

「…」

「もちろん、そのまさかよ」

「ちよ、ちよと待つて！ そんなことしたらオッサン燃えちゃう

！ 200万度の高熱でオッサン焼けちゃううううううううう！！」

「大丈夫よ、熱いのは一瞬だから」

「いや、そんなことしたら地球も一瞬で終わっちゃうから！！」

北風はオッサンに突撃しようとする太陽を必死に押さえつけた。

暴れる太陽のひじ打ちや裏拳が北風に襲い掛かるがそれでも北風は耐え続け、何とかして太陽を止めることに成功した。

こうして北風のおかげで地球が救われたのである。

ま、正直どうでもいいことだけどね。

「ルール追加あ！ 直接手を出してオッサンのコートを脱がしてはダメえ！！」

「チツ、わかつたわよ」

「よしっ、それじゃあ俺のターンだぜ！」

そう言うのと早速北風は思いっきり空気を吸い込んでそのまま一気にビューっつと吐き出した。

北風の吐息は突風となってオッサンの服を脱がしにかかる。

「あのさ、前から思ってたんだけどさ」

「ゼエゼエ、何？」

「アンタのそれってホントに原始的よね。超強力送風機を使えとまでは言わないけど、せめて扇か何かぐらい使ったらどうなの？」

「いや、だってこうやって息を吹いて風を作るのが伝統っていうか

……」

「新しいことに挑戦しようとか思わないの？ アンタってホントに
つまらない男ね」

予想外の毒舌に北風はがっくりとうなだれる。

いや、でもさ、太陽も本心でそんなこと言ってるわけじゃないん
だよ。そうだよ、太陽はツンデレなんだよ、ツンデレ。今流行りの
ツンデレなんだよ。

北風はそんなことを考えて現実に目を向けるのを止めた。

「それに見なさいよ、ほら」

「え？」

太陽がオッサンを指差した。

見るとオッサンは風が強いのでコートが飛ばないようにコートの
襟をきつちりと掴んでいた。

あ、オッサンの不自然な髪型が強風のせいで吹き飛ばされた。

やっぱりオッサンはズラだったのか……。

「なんだって……俺がこんなに息を切らしてまで風を起こしてるの
に逆効果だったなんて」

「あのオッサン、カツラが飛ばされてるのにコートの方に夢中ね。

ま、アンタの力なんてせいぜいカツラを飛ばす程度のものなのよ」

「そ、そんなことはないぜ。見てろよもう一度やればオッサンのコ
ートだって……」

再び風を起こそうとする北風の肩を太陽がポンと叩く。

太陽は笑顔で北風に言った。

「何度やっても無駄なのよ。所詮アンタはツラ飛ばし要員なんだか
ら」

太陽の毒舌が北風の心にザクザクと突き刺さる。
もうやめて！ 北風のライフはもうゼロよ！

「さあて、次は私の番かしらね」

傷んで立ち上がれず「ずっと俺のターンだぜ」とうわ言のように
言っている北風を完全に無視して、太陽は両手を大きく上に上げた。

「気温上昇！ エターナルフォースパイロキネシス！！」

太陽が中二病よろしくな叫びを上げるとなんと地球の温度がみる
みるうちに上がっていった。

まるで真夏のような、いや、それ以上の暑さ。

ジリジリと焼けつくような日差しがコンクリートジャングルを焦
がす。

温度計を見ると既に摂氏40度を越えていて、しかもまだまだ上
がり続けている。

もはや地球温暖化とかそういう問題ではない。

「こんな暑さの中じゃ流石に服なんて着てられないでしょ……っつて、
アレレ！？」

太陽が驚きの声を上げるのも無理は無い。

この立っているのもやっとなくらいのクソ暑さの中、オッサンは
信じられないことにその暑苦しいロングコートを着続けていたのだ
から。

「何だよ、どうしてよ」

「ふふふ、太陽。お前は判断を間違っていたようだぜ」

「!? どういうことよ、北風!」

「お前は暑くなればオッサンが脱ぐだろうと考えていた。だが、アシを見るお!」

北風はビシッとオッサンの方を指差した。

見ると汗をダラダラと流し、コートが汗で色を変えているにも関わらずオッサンは恍惚の表情を浮かべていた。

テカテカと光り出すオッサンの額。その顔はこの上も無く幸せそうだ。

「ひっ、あのオッサン変態じゃないの!？」

「そうだ。あのオッサンは変態なんだ。自分を極限状態まで痛めつけて快樂を得る、所謂『マゾヒスト』だったんだよ!」

「そ、そんなことが……」

「しかし、太陽のターンが俺より先だったらオッサンは服を脱いでいたかもしれないな」

「それはどういう……はっ! まさか、ツラが!？」

「その通り! ツラが無くなることでオッサンの体感気温は格段に下がる。だからオッサンはこの異常な暑さの中でも自分を痛めつけることに徹することが出来るんだよ」

「まさか、アンタここまで考えてズラを飛ばしたの!？」

「ははは、どうかな」

北風、侮れないヤツ。

太陽が心の中でそう思っている一方、北風は咄嗟にかましたハツタリが功を奏したことにホッと胸を撫で下ろしているのであった。

「ところでこれじゃあ勝負はどうなるのよ。引き分け?」

「いや、第二回戦で勝負を決めようじゃない……」

「あ」

「あ」

太陽を北風の口から不意に洩れた「あ」の音。

驚いたような顔をした二人の目線の先には先程のオッサンがいて、ちよつどオッサンの前を若い女の子が通り過ぎようとしていたところだった。

『ふひひ、お嬢ちゃん。ほーらあ』

オッサンはおそらくそのようなことを言ったのだろう。

というのもすぐに女の子の叫びでオッサンの声が掻き消されたからだ。

何が起きたのか？

もうお分かりだろうがオッサンはその女の子の前でついにコートを脱いだのだった。

無論、そのコートの下は一糸まとわぬ生まれたままの姿。

キヤアアアアアアアアアという女の子の叫びが天まで轟く。

「……………」

「……………」

「あのさ、私帰るわ。変なもん見て気分悪くなった」

「え、ちよつと太陽……………さま！」

「あー、もう勝負はアンタの勝ちでいいわよ。じゃーね」

そう言つと太陽はスタコラサツサと北風の前から消えてしまった。そこにはただ何とも言えない虚しさを覚えた北風が一人取り残されているだけだった。

北風は一応勝負に勝った？のだが、これで太陽にデカイ顔が出来るようになったと言うこともなく。

むしろこの意見以来、太陽は北風のことを避けているようだし、北風と会ってもそのまま気まずそうな顔をしてサアツとどこかへ行ってしまつのだ。

これは関係が悪化したってことじゃないのかな、カナ？

「どうして俺がこんな目に会わなきゃならないんだー！」

ほら、耳をすませば今日もどこかの空で北風の哀しい叫びが聞こえてくるだろう？

私は具になりたい(前書き)

> i23026 | 1270 <

ジャンル：脱力系鬱コメディ

私は貝になりたい

生まれてこのかた、何をやっても上手く行つた例が無い。

やることなすこと全てが空回りで、我武者羅にやればやるほど他人に迷惑を掛けてしまう。

罵声、嘲笑を浴び、同情を注がれ続けて数十年。

現実が辛いと言って、電子ケーブルの先の仮想世界に足を踏み入れたが知らず知らずのうちに誰かを傷付け、誰かに傷付けられる。もつどこにも、現実にも、仮想世界にも、自分の居場所は無い。

もう、何もせずひっそりと誰にも迷惑を掛けないように生きていけないものか。

誰とも関わらず、海の底のように真つ暗な場所で、ただ一人ひっそりと貝のように。

そう、貝のように。

私は貝になりたい。

あ、でもどうせならホタテに……いや、せめて蛤で。蛤をお願いします。

ああ、何だか貝汁が食べたくなくなってきた。

アサリの味噌汁でも買いにいくか……。

花は救いの手を差し伸べるのか(前書き)

> i23028 | 1270 <

ジャンル：たまにはこんな感じのお話もいいんじゃない？的なコメ
デイ

花は救いの手を差し伸べるのか

目が覚めるとそこは綺麗なお花畑だった。

そう、お花畑だ。右を見ても花、左を見ても花。

遠くの方まで見渡してもそこには果てなく続く色とりどりの花、
お花、お花畑。

いや、お花畑は別にいいんだけど何かがおかしい。決定的に何か
がおかしいのだ。

花に囲まれたまま俺は少し小首を傾げる。しかし、その違和感が
何であるのかはすぐに分かった。

ここには“花”しかないのである。

山も無く、川も無く、あるのは地平線まで続く花々とアホみたい
に青い空だけだ。

もちろん俺以外の人間はおるか蝶の一匹もない。

世界が広いとは言え、こんな場所が現実に存在し得るのだろうか。
いや、存在しないだろう（反語）。

一体ここは何処なのでしょう、誰か教えて下さい。

そんな現実味の無い実に奇妙な場所に俺はいるわけで……ん？
ちよつと待てよ。

お花畑がどこだとか、ここが何処だとかよりもっと大事な問題が
あるような気がするぞ。

……そうか、わかったぞ！

「どうして、何故？ どうして俺はこんな所にいるんだ」

数秒間の沈黙の後、俺が導き出した答えはそれであった。
どうして俺がこんな現実離れしたお花畑にいるのかということ、
そして俺は全く以て心当たりが無いのだ。どうしよう。

「ここは何処なんだ！ てか、何で俺はこんな所にいるんだー！」

軽いパニック状態に陥った俺はお花畑の上を狂ったようにゴロゴロと転げ回りながら、そんなことを叫ぶ。

だが、そんな俺の叫びに答えてくれる者は誰一人としていない。
俺の魂の叫びはアホみたいに青い虚空に吸い込まれて消えていく
だけだった。

いや、わかってたけど。誰も答えてくれないなんてわかってたよ、ホント。

「どうかされましたかー」

舞い散る花弁の中で一人ブレイクダンスを決め込む俺に随分と間延びした声が掛けられた。

声の質からして女か、それも相当な美人（の気がする）！

激しい回転によって掻き回された俺の脳みそが即座にそういう推論を打ち立てたのには我ながら呆れてしまうが、これも男の性さがと言うべきか。

まあ、そんなことはどうでもいいのでいい加減、地面に半分埋まっている頭を引き抜いて何か知っているだろうこの女に話を聞くことが先決だろう。

「あー、頭が埋まってますけど大丈夫ですか」

「いはいえ心配いらないつす、大丈夫です。ちよつと目に砂が入って痛いですけど。ところであなたに聞きたいことがあるんで……」

俺は起き上がり、砂でチクチクする目をこすりながら目の前にいる女性に話しかけた。と、同時に声を失った。啞然とした。

突然のことに声が出せなかった。というか驚いた。

それは何故か？

その女性があまりにも美人すぎて驚いた？ 残念、ハズレだ。いや、確かにかなり美人なんだがそれ以上に俺はその女性の姿を見て驚いてしまった。

絹のように透き通った白い肌、黄金のように輝くブロンドの髪。

柔らかな唇に讃えられているのは優しいな頬笑みで、その宝石のような瞳は見る者を魅了させてしまう程に深い色を放っている。

そして何より目を引くのはその頭上に輝く光の輪と背中から伸びる大きな純白の翼。

その姿はまるで天使のようだ。いや、まるでっていうかまんま天使じゃねえかコノヤロウ。

「あ、あのもしかしてあなたは……天使、さん……とか、まさかね、ははは」

「はい、私は天使のアズラエルと申しますです。そしてここは天国ですの」

な、ななな何てこつたい。俺は生まれて初めて天使に話し掛けられて、その上その天使ちゃんがこの世のものとは思えないくらい力

ワイイなんて。こりゃ皆に自慢できるな。あー、でもみんな信じてくれないかもな。

てかよく考えたら天使なんだから“この世のものとは思えないくらいカワイイ”って当たり前じゃんか。俺ってバカだなあ、あはは。そうか、そうかここは天国だったのか。どうりで現実離れしてると思っただぜ。だって天国だもんなあ……え、天国？

「て、天国だとお!？」

天国。それはつまり天上の国、ヘヴン。極楽浄土な黄泉の国でフイナルアンサーということだ。

いや、何の説明にもなっていないのは分かってるが、俺も相当ヤキが回ってるようだ。全く状況が掴めない。腐った脳ミソは処理がついていけず、とつくの昔にオーバーヒートしていやがる。

というかマジで天国なんですか、ここは？ 確かに天国って言うたらお花畑のイメージはあるけども。

それよりも天国って死んだ人が行く所だよな。ってことは何？もしかして俺って死んじゃってんの？ マジで、マジで？

ハハハ、笑えねえジョークだ、冗談きついで。なあ、これは夢なんだろ？ さあ、早く覚めてくれよ。まだ宿題が残ってるし、明日はテストなんだぜ。いつまでも寝てる場合じゃないだろ。このままじゃ赤点になっちまうぜ。なあ、だから早く、早く俺をこの夢から覚ましてくれよ！

「残念ですが、夢ではありませんの。あなたは今朝、通学途中でトラックに轢かれそうになった子供を助けようとして代わりに撥ねられたんですの。急いで病院に運ばれましたが、打ち所が悪くて昏睡状態が続き、とうとう魂が抜けてここにやって来ちゃったんですの」

「ま、マジでございますか」

目の前の天使の変な言葉遣いに釣られて変な返事を返してしまっ
たが、そんなことなど気にする様子も無く天使さんはニコリと微笑
んで「マジでございます」と答えた。ヤバい、なんなの可愛い。
いや、てか、マジで俺死んじゃってたのか。

「ああー、そうか。死んじゃったのか……俺」

「ええ、悲しいでしょうけどこれは現実です。でも、あなたのお
かげで子供も無事だったんですの」

子供。道路に飛び出してトラックに轢かれそうになった男の子の
ことだ。今朝、急いで学校へと向かっていた俺はたまたまその状況
を見かけて、そのまま考えも無しに突っ込んでいった。間一髪のと
ころで子供を歩道に押し戻し、そして俺の目の前には止まるに止ま
らないトラックが……。

そこから先は意識が飛んで全然覚えていないが、あの子供が無事
だったのか。よかった。

俺の死も無駄じゃなかったみたいだな、あはは。あれ、目から汗
が。

「あわわ、な、泣かないでくださいよー。その子供を自分の身を呈
して守ったという善行を考慮して、神様が特別に死後審査無しであ
なたの天国行きが決定したんですよー。これってとってもラッキー
でハッピーでエクセレントなことなんですよー」

ボロボロと涙を流している俺を宥めるべく、天使さんは慌てて柔
らかなハンカチで俺の涙を拭きながら話し掛けてくれる。

うう、ありがとう天使さん。いや、てか死後審査って何？ 本当

は面接とかあつて天国行きか地獄行きか決まるの？ 年齢とか職業とか年収とかで待遇とかが変わっちゃうとか？ なにそれこわい。

「ありがとうございます、天使さん。もう大丈夫です。それより死後審査つて……いや、何か怖そうなんでやっぱいいです。ところでここが天国なんですか？ さつきからお花畑しか見当たらないし、俺と天使さん以外は誰もいない。俺以外に誰かいないんですか？」

ここは確かに変だ。ここにあるものは一面のお花畑、俺、天使さん、以上。天国っていうのはもつといろんなものがいっぱいある樂園みたいなもんだと思ってただけ、これじゃあ何だか拍子抜けだ。

それに俺以外に人間がいないのはちよつとおかしい気がする。天国に行くことのできる善良な人間は世界で後にも先にも俺一人だけ！つていうことは流石に無いだろう。だからもつと人がいっぱいいていい気がするんだよな。

そんな感じで俺が小首を傾げていると、天使さんがエヘンツと胸を張つて説明してくれた（ドヤ顔で）。

「ここはまだ天国じゃないですよー。天国へと繋がる路、とでも言いましょか。天国行きが決まった善良な魂さんたちは一端ここで待機して貰っているんです。そして案内役である私が一人づつ天国の門まで案内してあげるんですのー」

つまり天国の入口までは美人天使が手取り足取り案内してくれて俺達は天使さんと歓談を楽しみつつ天国への旅路を歩む。天国への旅路をより良いものにするため、魂一人につき一人の天使さんがつききりでお世話してくれるというVIPな待遇。

『一生に一度の天国旅行を一生に一度の思い出に』

そんな感じのキャッチフレーズで天国は全力で魂たちをサポートしてくれるそうだ。

天国も随分とサービスピ精神が旺盛なんだな、と俺は天使さんの話を聞きながら少し呆気にとられる。

「えーと、てことは今から天国の門つてところに？」

「はい！ このアズラエルが快適な天国への旅を全力でサポートさせていただきますのー！」

満面の笑みを浮かべて俺に手を差し伸べる天使さん。ああ、こんな可愛い天使さんに連れられて天国行けるんなら別に死んだのも悪いことじゃなかったかもなあ……なんてことを考えていると、ふと脳裏に家族の姿が映った。

頑固な親父のしかめっ面。優しいお袋の笑顔。妹の照れ隠しの拗ね顔。ずっと毎日のように見て来た顔が遠くに感じてしまうのはどうしてだろう。

ああ、みんな、俺が死んでどんな顔してるんだろっなあ。

俺の頭の中を今までの思い出が走馬灯のように駆け巡っていく。

ああ、みんなに会いたいなあ。

家族に会いたい。最後に家族に会いたい。そう思ったと同時に俺の口から言葉が飛び出る。

「あ、あの、天使さん！ お願いです、最後に家族に会わせて下さいっ！」

「ええ！？ そ、それはちょっと難しいお願いですの……。あなたの魂を下界まで連れていくのにはかなり大きなエネルギーが必要で、色々な手続きをしないと許可が下りないんですの。それにもう時間

も押しちゃってますし、寄り道してたら天国の門が閉じちゃいます
です」

「そ、そんな。それに天使さんは全力で俺をサポートしてくれるん
じゃないんですか？ お願いします、どうか！ この通り！」

俺は屈んでずりずりと地面に額を刷りつけ天使さんに土下座して
お願いした。天使さんは本当に困った顔をしていたが、何か少し考
える素振りを見せた後、「わかりました」と言ってくれた。

「わかりました。後で神様に怒られるのも怖いですから今回は特別
ですの」

天使さんはそう言って、足元に咲いていた花を一本摘み取りその
ままその花をひと振りする。花弁にたまっていた水滴は宙に飛び、
次の瞬間、丸い水滴は薄く広がり大きなスクリーンを作り出した。

「直接あなたを下界のご家族の下に連れていってあげることが出来
ませんの。だけど、今のご家族の姿をこの水鏡に映してあげること
なら出来ますの。どうかこれで許して下さいです」

「あ、ありがとうございます、天使さん」

俺は喜びながらスクリーンを注視する。実際に会うことが出来な
くても姿が見れるんならそれでいいさ。

スクリーンは波打ちながら少しずつ像を結んでいった。そこに映
つたのは真っ白な病室、ベッドの上には変な機会にまみれた一人の
男が。あれは俺だ。

そんな俺の周りにいるのは頭を下げてるなだれる親父、ベッドの
上の俺の手を握りながら涙を流すお袋、そして部屋の隅にうずくま

つてすすり泣く妹。他にも担任の姿や友達もいる。

みんな目に涙を浮かべていた。彼らを泣かせた張本人は誰かと言われれば、もちろんこの俺だ。

ごめんよ、みんな。直接会って謝りたいけどちょっと無理なんだ、ごめん。本当にごめん。

温かい涙が両目から流れ出し、俺の頬を濡らして冷たくなる。天使さんは優しく包み込むように俺の肩にそっと手を掛けてくれた。俺はそのままスクリーンの前で泣き続けた。

……。

さて、どうしたのか。俺の涙は止まることを知らないようです。つきからずっと目からポロポロと零れ落ちている。比喻でも何でも無く、俺の足元には涙の粒で水溜りが出来てしまっただった。

流星に天使さんもそんな俺が心配になったのかオロオロしながら「大丈夫ですか」と連呼しているが、止めようとしても俺の涙は止まる気配を微塵も見せようとはしない。

ヤバいぞ、これはヤバいぞ。冗談抜きで涙が止まらねえ、何でだ。もう数分以上も涙が流れ続けるなんて俺は何か病気じゃないのだから。いや、それ以前にこのまま涙が止まらなかつたら脱水症状で俺、死んじゃうんじゃないの？ あ、そう言えばもう死んでるんだっただ（笑）。

いや、笑えねえよ！！ ああ、もう何か頭がボーっとしてきて色々とおかしいぜ。それに泣き過ぎて何だか鼻までズビズビしてきたし、目も痒くなってきたぞ。ああ、痒いかゆい、目がかゆい！

ん？ ちょっと待てよ、涙が止まらなくて鼻が詰まって、その上目が痒くなるって……もしかして……。

「天使さん、わがりましたよ。これ、多分、花粉症です!」

そうこれは間違いなく花粉症の症状だ。涙が出て、鼻がズルズル流れ出し、目が異常に痒くなる。

おそらくこの俺達がいる花畑の花粉が俺の花粉症を呼び起こしてしまったのだろう。まったく死んでからも花粉症になってしまったりはたまったもんじゃない。天国側も花粉症患者のためにこのお花畑をもっと別のものにリフォームする必要があるんじゃないだろうか。ああ、目が痒い、かゆい……うまい……かゆ……うま……。

あ、そんなアホみたいなことを言っていると、なんだか鼻がムズムズしてきたぜ。

あれ、ちよつと待て、こ、このムズムズ感は、も、もしかしてアレの前兆じゃあ……。

「ぶえつくしよん!!!」

思考が追いつくよりも先に俺は盛大なくしゃみを放ってしまった。その勢いのあるくしゃみは空気をびりびりと振動させ、大地がぐらりと揺れるような錯覚を俺にもたらす。

さて、くしゃみと言うのはかなり大きな衝撃力を持っているように思える。それが唐突なくしゃみであるというならなおさらのことだ。くしゃみを放った途端、身体中にその衝撃がびりびりと掛け巡っていく。そして一瞬、全てが吹き飛んでしまったかのような静けさが脳内に訪れる。

生身の体を持っているときでさえこれだけの衝撃力をくしゃみは

持っているのだ。ならば、肉体の無い魂だけの状態である俺がそんな破壊力抜群のくしゃみを解き放ってしまったらどうなるのだろう。

結論から言えば、俺はその場から吹き飛んだ。

くしゃみの衝撃に耐えることの出来る肉体を持たない俺は、そのままくしゃみの反動で何処かへ吹き飛んでしまった。いや、爆発した、という方がしっくりくるかもしれない。

そして俺は物凄い速さで吹き飛ばされていく間に意識を失ってしまった。

……。

目を覚ますとそこは真っ白な病室だった。俺の身体にはゴチャゴチャとした機械がたくさんついていて、身体を動かそうとするとビリツと痛みが走る。

何処なのだろう、ここは。しかし初めて見る景色のはずなのに、どこかで見た覚えがある。どうしてだろう。

疑問符を浮かべて一人悩んでると俺の視界に涙を流したお袋の顔が飛び込んできた。よく見れば親父も妹も、先生も友達もいるじゃないか。そして、みんな一様に涙を浮かべて、驚いたような喜んでいるような顔をしている。もしかして、俺、生き返っちゃったの？俺が啞然としてみると、周りのみんなが声にもならない声を上げて俺の方に押し寄せて来た。ちよ、ちよっとお袋、そんなに強く抱き締められると痛いって、痛い。

はい、そういうわけで俺は晴れて生き返ることが出来ました。

多分あのくしゃみの勢いでそのまま下界まで飛んでこれてそのまま自分の体に戻ることが出来たんじゃないかな。下界に来るには強力なエネルギーが必要だって天使さんも言ってたし、多分くしゃみのおかげで俺は生き返れたんだろう、うん。まあ、せっかく戻って来れたんだから細かいことは気にしなくてもいいよね。

それにしても急に俺がいなくなってあの天使さん困ってんじやないだろうか。きっとオロオロあたふたしているに違いない。ああ、でも美人な天使さんだったなあ。ちよつと惜しいことしたなあ。

そんなことを考えながら、俺は病室の窓から青空を見上げる。澄み切った空の青さが目に染みる。

空の上には今でもあの花畑があつて、ちよつと天然入ってる可愛い天使さんが甲斐甲斐しく働いているんだろうか。

少し耳を澄ませばあの妙に間延びした声が聞こえてくる気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3393n/>

短編集・鶏箱

2011年10月5日20時27分発行